
ポケットモンスター～虹に憧れる者達～

キシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター〜虹に憧れる者達〜

【Nコード】

N0445J

【作者名】

キシ

【あらすじ】

英雄と呼ばれたトレーナーがいた。トレーナーの名を『クロノ・S・ウィールアス』。

この物語は、英雄の血を受け継いだ子供たちが、己の『虹』を見つける物語である。

第零話 未来の姿

その部屋には、一人の老女が居るに座って、テレビに映し出された画面を、編み物をしながら見ていた。

豪華な造りのこの屋敷。『彼女』にとつてこの場はとても大切な場所であり、テレビの中でこれから行われる戦いは、2年に一度のみ行われる大イベントでもあった。

「あら……。もう試合が始まるの？早いわね……。」

試合開始のゴングと共に2人のトレーナーが互いにポケモンを出し、持てる力の全てを出して戦いだした。

一人は、挑戦者。数十回以来で有る。『ワールドリーグ』のチャンピオンに挑戦する人物が現れるのは。

そして、チャンピオンは白衣を纏って、威風堂々とした風格を。そして、何よりも美しい『虹』を纏っていた。

チャンピオンの後ろには、これまで彼を支えてきた『黒い理想』と『白い真実』。そしてパートナーのリザードンを従えていた。

「あなた……。あの子達は、もう立派に自分の虹を見つけたわ。……私の役目も終わりかしらね？」

そう言い、『彼女』は静かに目を閉じ自分の想い人にそう告げた。

「奥様。お茶の準備が整いました。」

戸を叩き、紅茶を持ってくるメイド。しかし、『彼女』は返事をすることには無かった・・・

「みんな！！先生のお兄さんがテレビ出てるぜー！！」

「え！？もう始まったの！見てえー！！」

「私も!!!」

体育の授業のため、グラウンドに移動中の小学生達の一人が渡り廊下でそう怒鳴ると、生徒全員が同じ意見を言い出した。

渋々グラウンドに集まる生徒達。今日の体育の授業は担任の先生が用事のため代理の先生が授業を行うが、その先生の生徒と同じ気持ちだった。

「・・・良し!!!今日は体育館で授業だ!みんな急いで移動だ!!!」

先生の号令で生徒全員は直ぐに体育館に移動し、巨大なプロジェクトで、『ワールドリーグ』の観戦を始めた。

カメラがワールドリーグの四天王を順に映した時、彼らの先生も移った。

「あ!先生だ!!!やっぱりカッコいいよなあ〜」

画面に映る先生を前に、男子生徒がうらやましがる。

そして、その先生の手持ちポケモンが映し出され、体育館は会場に負けないくらいの盛り上がりを見せた

『先生』のポケモンは、オーダイル、ボスコドラ、ザングース。そして『正義の三銃士』と呼ばれるポケモン達だった・・・

『・・・以上。四天王の頂点・・・さんのインタビューでした。』

選手控室に、世界最強のトレーナーが居た。
しかし、その控室のテーブルには大量の研究資料が散乱していた。
チャンピオンは、資料に目を通しながら、イヤホンから流れる、バ
トルの状況を聞いていた。
そして、今戦っている四天王の敗北を聞くと、書類をテーブルの置
き控室を後にした。

長い廊下を歩きながら、腰で遊ばせているモンスターボールを手に取り、語りかける

「今回は、君たちの出番があると良いね。」

そう言う彼の口元には、笑みが浮かんでいた……

『さあ！！来ました！世界最強のポケモントレーナーのお出ましだ！！……何時ぶりだろうか！？チャンピオンをその玉座から立ち上らせたのは！？さあ！チャレンジャー！チャンピオンの操る『理想』と『真実』をねじ伏せてその玉座を奪って見せる！！』

『チャンピオン！……だ！！』

そして、『彼』はバトルフィールドに立った……

第一話 「虹に憧れる者」プロローグ」(前書き)

新章スタートです！

第一話 「虹に憧れる者」プロローグ」

引いては打ち寄せる波の音。

そして、アルトマーレのトレーナーズスクールの授業終了の鐘が鳴る。

「ちょっと、ソウマ！！早くしてよ！！早くしないとお父さんの試合はじまっちゃうよ！！！」

栗色の長い髪をツインテールにした少女がトレーナーズスクールの入口で足踏みをしながら、一人の男の子を待っていた。

彼女の名は、ハクリ・S・ウィールアス。

「待つてよハクリ！そんなに急がなくても後30分も有るから大丈夫だよ？」

青い髪の少年は、肩で息をして、ハクリの前で膝に手を置いて話す。少年の名は、ソウマ・S・ウィールアス。

二人の両親の名は、クロノ・S・ウィールアスとアカネ・S・ウィールアス。

アルトマーレを。いや、世界を代表する、凄腕のポケモントレーナーで有る。

「そんな事言つてたら試合に遅れちゃうよ！せつかくの午前中授業で、久々に生でお父さんの戦う姿を見られるんだよ！？ああー！！もう良い！私先に行くからね！！！」

そして、ハクリはソウマを背にして、父のいるジムに向けて駆けて行った。

「あ！置いてかないでよハクリ！」

そんな、ハクリにソウマも必死についていく。

彼らは、大きな虹を見ていた。しかし、人は虹にはなれない。虹を見ているだけでは、何も始まらない。そう、虹を超えた先に有るを見た時。人は大きく変わる。

これは、綺麗すぎる虹に見いられ、己の中にある虹を見失った者たちの物語である。

第一話 「虹に憧れる者」プロローグ」(後書き)

さて、世界観の説明はまた次回から。

第二話 「大きな虹と小さな虹達」 (前書き)

ご迷惑をおかけしました。僭越ながら戻ってきました

第二話 「大きな虹と小さな虹達」

狭い路地を、駆けるハクリ。その後ろをソウマが付いてくる。

「おつ。よ、ハクリちゃんにソウマ。早くしないと、クロノの試合
始まっちゃうぞ?」

「絶対に間に合うもん!」

「出来るだけ急いでみます!」

ゴンドラ乗りのおじさんに茶化される2人。

太陽の神殿の目の前の広場に出た2人。そこから見える水面に浮かぶドーム。

そこが彼らの父親がジムリーダーを務める『ワールドリーグ』公認のジム。アルトマーレジムだ。

青と赤のカラーリングがこの街のシンボルポケモンイメージし、町の外観とマッチしている。

そして、ジムに入る。

「あら、ソウマ君にハクリちゃん。お父さんなら、もうリングインしちゃったわよ?」

受付の女性にそう言われ、ハクリは一発ソウマを殴る。

「もおー。ソウマが遅いから、お父さんがリングに入っちゃったじやん!」

「痛いよ、ハクリ。それに、まだバトルは始まってないじゃん。殴

る暇があれば、早く客席に行こうよお。」

そして、2人は客席に向かい、クロノに一番近い席に座る。

「お父さああああん！！」

大声で、手を振るハクリ。

「おっ！来たな、じゃじゃ馬娘にソウマ。」

ボードを持つ手を挙げ、クロノは自分の子供たちに合図する。

ここで少し説明しておこう。

ワールドリーグとは、2年に一度開かれる世界最大規模の大会の事だ。

このリーグの出場資格は、その年、または昨年のだこの地方のリーグで構わないので、そのリーグ戦で上位20位に入る事。

そして、各地方のワールドリーグジムを11カ月以内に制覇すれば、本戦に参加できる。

そして、本戦で見事優勝が出来れば、最高の称号『マスターオブマスター』の称号が授与される。

しかし、このジムはリーダーが変わる度、その場所を変える。さらに、ジムは一つの地方に纏まっている訳でもない。加えて、ジム戦は何もバトルだけとは限らない。

それもジムリーダーによって変わる。

ここ、アルトマーレジムのルールは、

- ・ 一対一のシングルバトル
- ・ バトルの勝ち負けは大して関係無い。
- ・ ジムリーダーが、対戦相手を通り抜けて採点する。対戦相手

が既定の点数以上の成績の場合、ジムバッチを授与する。
である。

「さて、それじゃ始めるよ。」

「は、はい！」

緊張する対戦相手。

無理もない。目の前には『英雄』と呼ばれたトレーナーが。

「い、いけ、サウムラー！！！」

「なら、俺らも行くぞバシャーモ！」

フィールドに並ぶ、サウムラーとバシャーモ。

「あれ、お父さんガラハットじゃないんだ。」

そうソウマが話す。

今のクロノの手持ち。いや、彼とこれまで戦ったガレス達はもういない。生き物としての寿命を迎えたのだ。今残っているのは、一番若かったガラハットのみ。そして、今クロノのメンバーのリーダーであった。

今クロノが出したバシャーモは、ガレスの子供でも有る。

ガラハットとて、人の年齢にすれば50を過ぎている。彼とクロノが過ごせる時は少ない。しかし、それは仕方がない事でもあった。虹はいつか消える。必ず……。

飛びかかるサウムラーの蹴りを、バシャーモは軽々避け、カウンターの一発を繰り出す。ように見えて、それを寸止めし、距離をとる。クロノは、単純な指示のみをバシャーモに送り、ボードにつけられている用紙に何かを記入している。

一見、クロノが相手をおちよくっているようにも見えるが、これもトレーナーを試している。そう、ジムに入った瞬間、ここでの戦いは始まっていた。

クロノと言う『英雄』と戦う緊張。たった一匹のみで挑むジム戦への不安。そして、ジムリーダークロノが見せるバトルスタイルへの怒り。

どれか一つにでも心が負けた時、このジムでの真の意味で『敗北』する。

これら全てに打ち勝った者のみが、ここのジムバッチ『アルトマーレバッチ』を受け取る資格を得られる。

「……もう良いだろ。バシャーモ、決めて良いぞ。」

ボールペンの芯を戻し、クロノはバシャーモにそう命じる。
刹那。

サウムラーと距離を詰めるバシャーモ。そして、けり上げ、宙に舞うサウムラー。続いてバシャーモも飛びサウムラーの後を追う。宙に浮くサウムラーの追い越し天井まで到達するバシャーモは、天井をけり、空中で身動きの取れないサウムラーの頭部に強烈な踵落としを決める。

そのまま、地面に落ちるサウムラーとバシャーモ。それで、この試合は決着がついた。

リング中央に集まる2人。

「ん。少し、力任せに攻める癖が有るけど、ポケモンとの信頼関係は良いね。あとは・・・もう少しサワムラーをい労わってあげてくれ。少し疲れ出てるみたいだね。でも、合格ラインには達してるから、ここのバッチは受け取ってくれて構わないよ。」

そして、バッチを差し出すクロノ。

しかし、チャレンジャーのトレーナーは受け取りを拒否した。

「・・・また、ここに挑戦します・・・。それまで受け取れません。」

「・・・分かった。なら、挑戦する前に連絡をくれ。君との対戦は可能な限り優先させるから。」

クロノに負けた事がよほど悔しい挑戦者。

いや、圧倒的な力量差を前に、悔しさが彼を動かしていた。

こういった挑戦者は少なくない。寧ろ、大半の挑戦者が同じような事を言ってここを去っていく。

酷いものになると、『ワールドリーグ』への挑戦を諦める者さえいる。

ジム戦を終え、帰り道を歩く3人。

クロノに肩車をしてもらっているハクリ。そんなクロノの手を握り有歩くソウマ。

日が沈み、太陽が水面に沈む様を彼らは見ていた。

「お前たちは、虹は好きか？」

「「うん!」「」

クロノの問いにうなずき2人。

「前に、話したよな。お父さんがお母さんと結婚する前に、この世界を作った神様が言った言葉。」

「覚えてるよ。」

ハクリが答え、ソウマが続けて答える。

「『人は空。照る日も有れば曇る日も有る』でしょ?」

「そうだ。曇る日も雨の日も有る空のように、みんなの心もそんな時が有る。でもな、みんな自分だけの空を持つてる。そして、自分だけの虹があるんだ。……お前たちも自分だけの空を見つけて、自分だけの虹を見つけてみる。」

少し困惑するソウマとハクリ。

そして、ハクリがクロノに聞く。

「ん〜。そうすればお父さんみたいに強くなれる?」

「さあ〜。それはお前の頑張り次第だな。」

笑いながらハクリに答えるクロノ。

そしてソウマもクロノに問う

「じゃあじゃあ！僕もクリアスさんみたいに、コンテストでうまく演技出来るようになるかな?」

「出来るぞ。お前達が、『虹』に向かって歩いていけばな。さあ、帰ろう。お母さんとみんなが待ってる。」

「「はい」」

そして、彼らは家に向かって歩いて行った。

夕日に浮かぶ一つの影。

四肢をもち、白い体に、神々しい光輪を持つポケモンの影。

世界から、争いが大幅に減った現代。

それまで、伝説のポケモンの目撃例は少なかったが、ここ数年。

彼らの目撃例が爆発的に増えた。中にはそんなポケモン達と心を通わせた者すらいる。

ホウエンのタワータイクーンにバトルピラミッドのマスター達。

シンオウのタワータイクーンのマスターがその例だった。

そんな世界になる前での裏側には『英雄達』に姿があった。

そして、アルトマーレに夜が訪れた。

「もしも〜し、本部？下準備出来ましたよ。何時でも作戦に移れま
すからよろしく。ついでに『英雄達』のデータも送るときまーす。」

太陽の塔に天井。 おおよそ人がいる場所ではないところにその女性
は居た。

ポケギアを畳み懐に仕舞い、この街で一番大きな屋敷。 ウィールア
ス邸に視線を向ける。

「ん〜、英雄さん。今まで散々こっちの計画を阻止してくれたお礼
は、19年分の利子をつけて纏めてお返ししちゃうよん。」

下を出し笑う女性。いや女性と言つには少し幼さが残る顔立ち。
そして、女性は夜のさらにポケモンと共に消えていった……。

第三話 「再会の約束」(前書き)

時間が無かったのでつなぎ的な御話でお茶濁しです

第三話 「再会の約束」

大きな扉。その先がハクリとソウマの家だった。いや、彼らの家と言った方が正しい。

ギイ……

重く鈍い音を立てながら扉は開いていく

『おかえりなさいませ、旦那様』

赤い絨毯を挟み並ぶメイドと執事達が、一斉にクロノ達にお辞儀し挨拶をする。

「おう、ただいま。……親父とアカネは？」

「社長と奥様でしたら、書斎でお仕事の話を。あと、ワタル様とクリア様からお電話が有りました。ワタル様は後から追ってご連絡を頂けるそうです。クリア様は、近くまで所用で来られるそうですね、夕食を御一緒に頂きたいとの事でした。いかがいたしますか？」

一人のメイドから、連絡を受けるクロノ。しかし、クロノの答えより先にソウマが口を開く。

「え！クリアさんが来るの！？お父さん！ご飯一緒に食べようよ！！」

嬉しそうに話すソウマ。

無理もない。クリアスの名はクロノと同等に世界に知れ渡っている名トレーナーで有ると同時に、名コーディネーターであり、名俳優でもある。しかし、本職は自然保護協会の会長である。そして、ソウマがトレーナースクールで選考している科目はコーディネーターである。まさにソウマの憧れの人だった。

「と言う訳だから、クリアスにこっちに来るように連絡入れてくれる？」

「すでに連絡済です。」

「・・・相変わらずお早い事だ。」

「恐縮です」

仕事の速さに感服するクロノ。

そして、ハクリを下し、クロノはケルアとアカネがいる書齋に足を運んだ。

「わー！クリアスさんが来るんだ！！あードキドキしてきた・・・
・！」

自分の部屋でクリアスが来るのを待ちわびるソウマ。ベットの上には彼のパートナーのオタチとエアームドが丸くなり休んでいる。

「コンテストねえ・・・。私には何が面白いのかわかんないなあ。」

椅子に座り、足をブラつかせるハクリがソウマに言う。

「やっぱり、お父さんの子ならバトルで一番を目指さなきゃ！ね、ザンゲース、コドラ。」

そして、ハクリの横で座っているザンゲースとコドラに問う。2匹は「その通り」と言わんばかりに首を縦に振る。

今だ旅に出ていない2人。2人は9歳。しかし、後、2週間で彼らは10歳の誕生日を迎える。そして、自ら目指す道に向かって旅に出る。

「で、そいつらの足取りはつかめず、か。・・・相変わらず逃げ隠れがうまいな。」

本棚によっかかるクロノが手にした書類に目を通し、そう話す。

「ごめんなさい。ワタルさんのくれた情報を元にして、調べたんだけどそれくらいしか分からなかったの。」

椅子に座り、話すアカネ。

今の彼らは多数の草鞋を履いていた。

クロノは、マスターリーグの公認ジムリーダー。そして、自社のウイールアスコーパーションの副社長。そして、ワタル同様にポケモン治安維持局にも与している。

アカネは、何でも屋稼業は止めているが、新しくウィールアスコ―ポレーションの児童玩具制作部門のチーフとして働いているだけでなく、クロノの補佐的な役割を兼任している。

そんな彼らに一番奥の席に腰かけているケルア。

少し老けた風に見える、白髪も増えたが、それが逆に貫禄が出てケルアの威厳をより一層深くしていた

「・・・しかし、お前たちは。少し働きすぎではないか？いくらアルセウスとの約束と言えど、このままでは先に体がバテてしまうぞ？もう少しでハクリ達も旅に出るのに。」

ケルアの言葉を鼻で笑うクロノ。そして。

「親父と同じ立場になって分かったよ。どれだけ息子達がかわいいかが。そいつらが安心して旅ができるように俺達『大人』が頑張るんだろ？・・・親父見たく俺たちにも少し無茶させてくれよ？」

そんなクロノを見て、ケルアは悟った。

「そうだな。だが、その息子達のために時に休息も大事だ。・・・ひと段落したら、少しは休めよ？」

「はい、御父さん。」

「やはりキミにそう言われるのは慣れないな・・・」

アカネに父親と呼ばれ、恥ずかしきなるケルア。

「ははは……。もう何年になるんだよ。いい加減、慣れるよ?」

「お前も、ソウマの嫁にそう言われれば分かるぞ?」

「ソウマの彼女が……。」

「いつか、ハクリも彼氏を連れてくるかもしれないぞ?」

「いや!ハクリは嫁には出さん!」

クロノのあまりにも真剣な顔をアカネとケルアは笑っていた。

動く歯車は止まらず。人を魅了した虹が消えかかっていた。

笑顔の時はそう長く続かず、闇の因子は子に受け継がれていった……

第四話 「他愛もない時間」

落ち着き無く部屋をうろつくソウマ。

時折、ベットで欠伸をしているエアームドの頭をなでたりして、気を紛らわせている

「あゝドキドキしてきたあゝ。クリアスさん早く来ないかなあゝ！」

ベットに飛び乗り、オタチに抱きつきながら嬉しそうに話すソウマ。そんなソウマを横目に、若い頃のクロノのバトルのビデオを見ているハクリが話す。

「まあゝ。少しは落ち着きなよ？くるって約束したんでしょ？それより、少し静かにしてよ。テレビの音が聞こえないよ！」

「うゝゝゝ。ごめん。」

ハクリに怒られようやく静かになるソウマ。そんな時だった。

『おお！クリアス！よく来たな。まあ、ゆっくりしていつてくれ』

「来た！！」

子供部屋まで聞こえてくるクロノの声を聞き、ソウマはポケモンを連れて部屋を飛び出していく。

「はあゝゝゝゝ。本当にソウマはクリアスさん相手だと子供になるんだから。」

テレビとビデオデッキの電源を切り、ハクリも部屋を出ていく。

「で、クリアス。電話ではお前一人って聞いたんだが？」

椅子に座り、クロノはクリアスの横に座る人物に目を向ける。

「ん〜？おっさんが居ちゃダメなの、副社長さま？いいじゃん、小さな同窓会みたいで。それに、この腕のお礼もしたいしさ。」

クリアスの横に座る人物・星が新しくなった左腕を振りながらクロノに話す。

今年で60を超える年になるが、体力や身体能力はクロノ達と戦った時と変わらず今も、情報屋をして生計を立てていた。

18年前のテンガン山での戦い無くなった左腕をウィールアスコ―ポレーションが、戦いの功績をたたえて無料で治療したものだっ

「にしても、大きくなったねえ〜。お子ちゃま達は。もうすぐ旅に出るんでしょ？」

クロノとアカネの横に座るハクリ達を見て話す。

「はい。あと二週間で僕たちも10歳になってようやく旅に出ます。」

「ほえ〜。まつ、旅に出て一皮剥けてきな。お子ちゃま達のお父さんもかなりやんちゃだったからねえ〜。……………それより副社

長、そろそろご飯にしない？おっちゃん腹減った。」

「そうでしたね。ではそろそろ食事にしましょう。」

だらける星を見て、アカネが食事を運ぶようにメイド達に合図を出す。

豪華な食事を終えて、食事の余韻に浸る面々。

「さて、ではソウマくん。私に聞きたい事が有るんじゃないですか？たとえば、コンテストについてとか？」

紅茶を飲み終え、迎えに座るソウマにクリアスは笑顔で話しかける。食事中、何度もクリアスを見ていたソウマ。

「はい！えっと、コンテストのコツとかを教えてください。」

「いいですよ。では、主。少しお庭をお借りしますが、良いですか？」

コーヒーを飲み、クロノは答える。

「おう、悪いな。子供たちの我儘に着き合わせて。ソウマ、ちゃんとクリアスにコンテストの事教えてもらえよ。」

「うん！」

そして、クリアスの手を引いて中庭に行くソウマ。

「ねえ、お父さん。私にもバトルのコツとか教えてよ。」

「ん？そうだな……。クリアスも居るし、いっちょもんでやるか。おっさんもどうよ？世界を担う若人達にもまれてみないか？」

デザートを食べている星にクロノは問う。

「ん？そうねえ。……。んじゃいっちょ揉まれまわってみますか。」

そして、3人もクリアス達に続いて、中庭に向かった。

ようやく静かになった頃。

ソウマとハクリは、すでに床に着居ているはずの時間たい。いっようなれば深夜である。

中庭のテーブルで話し合う4人。

「なかなか、勉強していますねソウマ君は。」

「そうか。お前にそう言ってもらえると、ソウマも喜ぶぞ?」

クロノとクリアスが話していると、中庭に冷気が吹く。

今の時期では少し蒸し暑いくらいの温度であるため、冷気。それも雪が降るがほどの風が吹くなどありえなかった。

「……で、寒いんだけどフリーザーさんよ。」

彼らの頭上を覆う大きな木の枝にとまる、冷気を帯びた伝説のポケモン・フリーザーがいた。

「……この時期は我には堪える。しかし、ここは幾分涼しい。しばらく休ませてもらうぞ。」

フリーザーの止まる枝が次々に霜に覆われていくのは言うまでもない事だった。

「ったく。俺ん家は緊急避難場所かよ。」

そう毒づくクロノを知ってか知らずか、さらなる来客者が来た。

「そう言うな。ここに皆が集まるのはここが居やすいからだろう。」

「お前もよく来るな、エンティ。」

クロノの後方から現れたエンティ。

「ライコウは元気してるのか?」

「ああ。良きトレーナーに出会えて、日々充実しているそうだ。バ

トルタワーなる施設で毎日のように己を鍛えているそうだ。」

そんなた他愛もない会話をして、今宵のアルトマーレの夜はさらに深けていった。

世界が変わり、伝説のポケモンと呼ばれたポケモン達は、神から与えられた使命を離れ、人と同じようにこの世界で生きている。

そして、彼らも人も、互いを信頼し始めてきていた。

昔のように、人とポケモンがまた、別け隔てなく過ごせる世界はすぐそこまで来ていた……。

しかし、英雄はその世界を見る事はなかった……。

第五話 「夢への一步」

穏やかな日々。美しく奏でる波の音。

アルトマーレのトレーナースクールでのバトル場で響くバトルを意味する轟音。

「ザングース！そこでシャドークロー！」

対戦相手を指差し、ハクリがザングースに指示を出し、対戦相手のポケモンに留めの一撃を放つ。

そして、フィールドに沈む相手のポケモン。

「そこまで！今回の模擬戦はハクリちゃんとザングースの勝ち。・・・すごいわねハクリちゃん。今日の模擬戦、負け無しね。」

ジャッジを務めていた先生が、ハクリの今日の戦績を純粋に褒めていた。

「ありがとうございます。でも、今日はザングースとコドラが頑張ったからよね？ね、2匹とも？」

「「ガウッ！」」

そうハクリが2匹に話すと、2匹は首を縦に振る。

そして、そんな2匹の頭を優しく撫でる。

「やっぱりハクリちゃんは強いよねえ。」

「だって、親父がジムリーダーなんだぜ？勝てっこねえーよ。」

「ええ、それは関係無いよお？それは負け惜しみってやつだよ。」

そう口々にするハクリのクラスメイト達。

クロノを父親に持つ事を羨ましがる子もいるが、やはりハクリの実力を純粋に認めていた。

トレーナースクール内のコンテスト練習用ステージに、コーディネーターを志す子供たちが、ポケモン達の美を競っていた。

「オオタチ！冷凍ビーム！さらに叩きつける！」

ソウマの指示に従いオオタチは上空に冷凍ビームで氷の塊を作り、その塊を空中でその氷塊を尻尾でたたき割る。

粉々に砕かれた氷塊は小さな氷の塊となり、宙を鮮やかに彩る。

「最後に、スピードスター！」

そして、彼のパフォーマンスの最後を彩るスピードスター。

スピードスターは宙に漂う氷の粒にぶつかり、さらには反射しその姿を変えていく。

そう、まるでスターダストのような幻想的な世界に、この空間を変えた。

「素晴らしいよソウマくん！まあさに、天才と呼ぶにふさわしい子だよ！！ティーチャーたる私も鼻が高いよ！！！」

少し興奮気味に話すコーディネーター科の先生が両手を広げて話す。余談だが、この先生はいつもこのような口調で話す。

「やっぱり、ソウマ君のアピールは綺麗だね。」

「どうやったらそんなアピールが出来るの？」

多少女子率が高いコーディネーター科。

今のソウマのアピールを見て、クラスメイトがソウマを囲み、今のアピールのコツを聞きメモに取る。

「だから、氷を割る時の大きさが重要なんだ。大きすぎてもダメ。逆に小さすぎると見えなくなっちゃう。おと、スピードスターの威力も重要だね。あんまり強いと、氷だけが砕けちゃうからね。」

「へえ〜。そうなんだ。」

「すごい。参考になる。」

目もとりながら、感心するクラスメイト。

「やれやれ、これだはどちらがティーチャーなのか分かりませんね。……ですが、良いセンスを持っていますね。将来はどう化けますかね。」

整えられた顎ひげをなでながら、クラスメイトに囲まれるソウマを見る先生。そして、彼の未来を期待していた。

今日の授業が終わり、クラスは最後のホームルームを始めていた

「さて、今日で皆さんのここでの授業は終了です。ようやく明日、みなさんはトレーナーとして世界を旅する訳です。明日は、みなさんがそれぞれ希望する新しいポケモンを受け取り、本当の意味で最後の挨拶をしたら、皆さんはもうトレーナーです。……先生から詳しい話はもう有りません。ですが最後に……みなさん、ポケモンは道具では有りません。それだけは忘れないでくださいね。」

「……はい……」

クラスが一丸となって返事をする。

そして、その中にハクリも居た。

少し補足しておこう。

先刻先生が『希望するポケモン』と言ったそれは、新人トレーナーは、それぞれ希望するポケモンを一匹を旅立ちの日に配るという規則の事だ。

無論、世界全てのポケモンではない。以前は各地方によって選べるポケモンに制限があったが、今の新し規則にはそれが無い。

そして、選べるポケモンは炎、草、水・各4種類の内一匹である。

炎タイプはヒトカゲ、ヒノアラシ、アチャモ、ヒコザル

草タイプはフシギダネ、チコリータ、キモリ、ナエトル

水タイプはゼニガメ、ワニノコ、ミズゴロウ、ポッチャマ

これらの中から一匹を選び、トレーナーとしての第一歩を踏み出す。

「では、スチューデント諸君。みなさんの今後は険しい道でしょう。」

ですが、諦めないでください。みなさんの歩んだ先には必ず、光りある未来が有るのですから。・・・では、最後のホームルームをエンドしましょう。グッバイみなさん。」

そして、コーディネーター科の先生も涙ながらに自分の教え子たちと最後の別れを行った。

夕日の色が海に移り、茜色に染め上げる。

帰り道の細い道。ソウマとハクリは並んで歩いていた。

「ねえ、ソウマ。ソウマはどの子を選んだの？やっぱり将来性を見てポツチャマ？それともお父さんみたくアチャモ？」

「実はまだ決めてないんだ。一応、ヒトカゲって選んだけど。ほんとにヒトカゲでよかったのかなって思っちゃって。そう言うハクリは？やっぱりアチャモ？」

ハクリの横顔を見るソウマ。

「ううん、違うよ。私はワニノコ。将来はお父さんに挑戦するから今から対策をしなくちゃ！」

「そうなんだ。ハクリは良いな。そんなに、自信満々で。・・・僕、いざ旅に出るってなったら不安で。」

そんな、ソウマの言葉を聞き足を止めるハクリ。それにつられて、ソウマも足を止める。

「どうしたの？」

「手、握ってみて。」

ソウマに手を差し出すハクリ。そんなハクリの手を握るソウマ

震えていた。

「私はソウマがうらやましい。私はソウマの倍以上頑張つてようやくクラスで1番強くなれた。でもソウマは違うでしょ？初めっからクラスで一番だった。……自信もって良いのはソウマの方だよ。ソウマはすごいんだから。私の自慢の兄弟なんだから！」

「……ありがとう、ハクリ。」

「あっ！でも、旅に出たら私達ライバルだからね！忘れないですよ！」

「僕だって負けないよ！」

笑い合う2人。そして、温かい家族が居る我が家に向けて足を進めた。

入口以外全て巨大な水槽がこの部屋の壁だった。
水槽の中には多種多様の水ポケモン達が泳いでいた。

「で、各々順調に計画は進んでいるのか？」

数段高くなっている所に椅子に腰かける大男が眼前に跪く6人の人間に言う

「はい。19年前にアカギ、サカキ。そして、サイカが勝手に行動を起こしたため、いささか動きが取りにくく有りましたが、すでに機は熟しました。何時でも行動を起こせます。」

「いや。サイカの前例がある。それに最後の幹部の椅子が空いている。行動を起こすのは『憤怒』の席が埋まってからだ。……『憤怒』にふさわしい『器』は目星はついているのか？」

「はい。『憤怒』には、『英雄』がふさわしいかと。」

「そうか。では、その件は貴様に任せる。これ以上の失態は許さんぞ？」

「はい。」

光があれば必ず闇が有る。光で照らせない場所が有る。
そう、何時の時代も必ず悪がそこにあるのであった・・・

第六話 「新しい旅立ち」

トレーナーズスクールの敷地全てを使って行われている、パートナー選別会。

柵を使い、その中で自由に遊びまわるポケモン達。

12の柵に分けられ、各種のポケモン達だけで纏められていた。

「待て待てー！」

「ワニワニー！」

柵の中を楽しそうに駆けまわる、ハクリと一匹のワニノコ。

そして、逃げ場をなくすワニノコ。

不敵な笑みを浮かべるハクリとワニノコ

「さあ、観念なさい。鬼ごっこももうおしまいよ！」

「ワニワニー！」

にらみ合う1人と1匹。

「あつ！あそこにバナナ！」

明後日の方向を指さすハクリ。

それにつられて、ワニノコも指差す方を向いてしまう。

「隙有りiiiiiiii！」

ワニノコに飛びつくハクリ。

そして捕まるワニノコ。

「じゃ、今からよろしくね、ワニノコ。」

「ワニ！」

ハクリ類をなめるワニノコ。

こうして、ここに新しいパートナーが生まれた。

ヒトカゲの柵では、すでに何人もの生徒が新しいパートナーを決めて、スキンシップをとっていた。

しかし、ソウマは少し離れた場所で、ヒトカゲの群れを見つめていた。

「ん〜。どうしたのかな。ソウマく〜ん。」

「あ、先生。」

「……さしずめ、本当にヒトカゲを選んで良いのか。と悩んでいますねえ？違いますか？」

「……当たりです。僕は本当にヒトカゲを好きで選んだのか、ヒトカゲは僕と旅をしたくないのか。そう変な事を考えてしまうんです。考えたら、なんか選ぶのが申し訳なくて。」

顎ひげを整えながら、考える先生。

「…………ソウマ君は運命の出会いを信じますか？ 出会いなんて、案外単純なものです。ソウマ君が用紙のポケモンを選ぶ欄でなぜ、ヒトカゲにしたのかは分かりません。たまたま、一番上に名前が有ったから。誰か、プロトレーナーがリザードンを使っているのに魅力を感じたから。それこそ様々です。出会う切っ掛けなど、往々にして単純な物ですよ。大切なのは切っ掛けより『過程』です。勇気を持って。」

ソウマの背中を軽く押す先生。

そして、ソウマはヒトカゲの柵の中に入って行く。

ソウマに興味を示すヒトカゲ。いたずらをするヒトカゲ。興味無さるうに離れていくヒトカゲ。様々な個体がいた。

しかし、ソウマの目のとまった一匹のヒトカゲ。他のヒトカゲとは、少し離れ柵の外を見ていた。

しかし、それよりもっと目を引いたのは、そのヒトカゲの尻尾の炎の色だった。

青い炎を灯すヒトカゲ。

「ソウマ。あのヒトカゲに近づかない方がいいぞ。俺、さっき引つかかれたし。他の奴は尻尾の炎で火傷させられた奴もいるみたいだぜ？」

ソウマの知り合いがその、ヒトカゲを見ていたソウマに声をかける。しかし、ソウマはその忠告を無視してヒトカゲに近づく。

「何が見えるの？」

「……………」

そう声をかけるソウマ。目線のみ向けるヒトカゲ。しかし、すぐに目線を柵の外に戻す。

そんな、ヒトカゲの横に座るソウマ。

ヒトカゲと同じものを見た。

空と海の境界線だった。

「綺麗だね。キミの尻尾の炎みたいに青い色してるね。」

「……………」

「……………空が好きなの？」

「……………」

「……………飛んでみる？」

「？」

小首をかしげるヒトカゲ。

そして、ソウマはエアームドを出し、ヒトカゲを背中に乗せる。

エアームドは、空に舞い、しばらく空を舞い続けた。

ほどなくして、空から戻ってくるエアームド。

「どうだった？気持ちよかった？」

うなずくヒトカゲ。しかし、その目は、さっきより生き生きした目

をしていた。

「キミも、進化すれば、また飛べるよ。頑張つてね。」

頭を撫でて、ソウマはその場を離れた。

離れていくソウマの足に小さな重みがかかる。

さっきのヒトカゲが、ソウマの足にしがみついていた。

「僕と、一緒に来たいの？」

うなずくヒトカゲ。

そして、捕獲用のモンスターボールを取り出し、ヒトカゲの前に差し出す。

ヒトカゲは自ら、ボールの中に入っていく。

一部始終を見ていた先生。

「出会いとは、偶然ですよソウマくん。そして、偶然は一種の運命でも有るんですよ。」

一人、小さな拍手をささげる先生。

全生徒が新しいポケモンを選び終わり、本当の意味で生徒は『トレナー』としての一步を歩き出した。

歩き出す前に、家に帰る者。

何も言わずに旅立ち者。それも様々だった。

細い道を走るソウマとハクリ。

「ねえ、ハクリ。本当にこのまま旅に出るの？せめてあ母さんにだけでも……」

「ダメ！次にお父さんの前に立つ時は、娘としてではなくて、『挑戦者』として立つって決めてるの！！」

そう話すハクリ。それに付いていくソウマ。
そして、付いたのは一つのゴンドラの修理工場。

「ボンゴレさん！こんにちわー！」

大声で工場の主を呼ぶハクリ。
奥から出てきたのは、一人の小太りの老人。
名をボンゴレ。

普段は、ゴンドラの修理を請け負っていたり、博物館のガイドをしたりしている。

しかし、本当はアルトマーレの隠されて庭を古くから守っている一族の者だった。

その庭はこの島を守ったラティアスとラティオスを祭っている神聖な庭でもあり、クロノとその血縁者、さらにクロノとボンゴレが認められた者のみが入りしている。

このアルトマーレの住人ですら、その庭に存在は知るものが少ない。

「やあ、ハクリちゃんにソウマくん……やっぱり、お父さんたちに何も言わないで、出ていくのかい？」

「はい。キンセツまでお願いします。」

「仕方がないか……。今、ボートを出すから待っていてくれ。」

ボンゴレの操るボートに乗り、アルトマーレから離れていく2人。

「……………やっぱり怒るよねお父さん達。」

「でも、これが私たちの選んだ道だし。仕方がないよ。」

そして、急にとまるボート。

「いや、すまん二人とも。ボートが故障してしまった。修理するか、しばらくあそこで待っていてくれ。」

ボンゴレが指差した先。

アルトマーレジム。ボートは丁度、アルトマーレジムへ続く栈橋付近で停止していたので、行くには問題は無かった。

「分かりました。……………ソウマ、ジムに行ってみよう。」

「うん。今日はジム戦は無いみたいだから、お父さんも居ないと思うし。」

そして、ジムに向かって歩く2人。

何時も通っている道だが、今日は少し違った。

緊張。そう、トレーナーとして、ジムに入る時のあの緊張が有った。

「私もいつか、この扉を挑戦者として潜るんだ……………」

扉に手を当てるハクリ。
しかし、扉を簡単にあいた。

「あれ？お父さん鍵閉め忘れたのかな？」

「泥棒が居ないか、見てみる？」

うなづくハクリ。

そして、中に入っていく2人。

ジム内は物色された後は無く、至って普通だった。
そして、バトルフィールドの間へ続く扉を開ける。

電気もなく、うす暗いフィールド。

トトレナーサークルに立つハクリとソウマ。

「はあ……。早くここに立ってお父さんと戦いたい……」

「僕もみたいな、ハクリのそんな姿。」

「なら、今見してみる。」

2人の知っている声がフィールドに響く。

そして、フィールドに明りが灯る。

二人の対面に居る人物。

ジムリーダーのみが立つ事を許されるトトレナーサークルには、クロノの姿が。

ジャッジが立つ場所には、アカネの姿が。

観客席には、クロノの旧友の姿が。

「さあ、挑戦者ハクリ、ソウマ。構える。」

困惑する2人。

「お、お父さん。なんで・・・」

「おいおい、何年お前たちの父親やってると思ってんだ？お前たちの行動なんてお見通しだって。」

「ふふふ・・・。本当はボンゴレさんから、電話が有ったの。勝手に島を出ていこうとしていますって。」

「おい、アカネ。それを言うなって。」

笑うクロノとアカネ。

「で、俺からの挑戦は受けてくれるよな。2人とも。」

笑顔だが、真剣なまなざしのクロノ。

ソウマ達の答えは決まっていた。

それぞれがボールを構える。

「では、ルールを説明します。使用ポケモンはソウマ、ハクリは一匹ずつ。クロノは二匹のみのダブルバトルスタイル。良いわね？」

「はい！」

アカネからの説明を受けて、3人はボールを空に投げる。

「子供たちの門出だ！全力で行くぞ、ガラハット、バシャーモ！！」

「私の新しいパートナー！行くわよワニノコ！」

「僕達も行くよ！ヒトカゲ！」

4体のポケモンがフィールドに並ぶ。

「では。・・・バトル開始！！」

アカネの合図と共にフィールドを駆けるポケモン達。

今、この時間。

それは、ソウマとハクリにとって最高の時間だった。
勝っても負けてもどうでもよかった。

父親が、世界で英雄と呼ばれている人が、クロノが。全力で相手をして
してくれている事が嬉しかった。

しかし、これが彼らの最初で最後のバトルでもあった……………

船着き場で、ボンゴレの船が出航する準備を終え、乗客の2人が乗
るのを待っていた。

「連絡は、適当によこせよ、2人とも。」

「うん。お父さん達も体につけてね？」

クロノがソウマに手を差し出す。

ソウマはそんなクロノの手をとり、固い握手を交わす。
そう、今この時、2人は『親子』ではなく、『一人のトレーナー』
として握手をしていた

「じゃあ、お父さん行つてきます!!」

「おう!行つて来い!じゃじゃ馬娘!!」

乗客を乗せたボートは、アルトマーレを後にし、小さな虹を持つ2
人と共に見えなくなった。

「行つちやっただね。子供達。」

「まあ、いつかはこうなる時がくるって分かつて事だ。次に面と向
かって立つ時は、本当に挑戦者としてくるかもな。」

子供たちの未来を感じて、彼らは温かい眼差しで子供達を見送った

第七話 「初めの一步・理不尽だよ」(前書き)

瀕死の状態で投稿しました・・・

第七話 「初めの一步・理不尽だよ」

アルトマーレと違った、潮風がハクリの二つに分かれた髪をなでる。

「ボンゴレさん、ここまでありがとうございます。」

「構わんよ。それより、気をつけて旅をしなさい。」

そして、ハクリ達はボンゴレと別れ、カイナシティの市場を歩き出す。

港の市場は相変わらずの賑わいを見せていた。

トレーナーの必要な物、日用品、食糧。様々な物が売っている。

そして、このカイナシティにはソウマのコンテスト制覇のための第一歩を踏み出すために必要な施設が有った。

「ねえ、ハクリ。僕先にコンテストドームに行きたいんだけど・・・」

浮かれるハクリにソウマが言うが、すでにハクリの姿は無かった。近くの屋台の物を食べ歩いていた。

「はぁ・・・。とりあえず、先に登録だけでもしてこよ。ここなら、ハクリとはぐれる事もないし。」

そして、ソウマは一人でコンテスト会場に向かった。

カイナのコンテストドームは、ハウエンでのコンテストに参加する

のに必要な登録をしている唯一のドームである。

ホウエンでコンテストに参加するには必ずここに立ち寄りなくては
いけなくなる。

ソウマも例外ではなかった。

「すみません。コンテストの参加登録をしたいんですけど。」

コンテストの受付の女性にそう話すソウマ。

「はい、分かりました。登録しますので、トレーナー免許書を貸し
てください。」

受付の女性に言われ、ソウマはリュックから、トレーナーの証でも
ある『トレーナー免許書』を女性に預ける。

トレーナー免許書

正規名称『Trainer License Gear』と呼ばれ
る小型の電子手帳である。

トレーナーの身分証明書であり、ポケモンの関連商品を購入時など
に使われる。

これが無くては、トレーナーとして認めてもらえない。

受付の女性はソウマのGearをパソコンにつなげ、キーボードを
操作する。

ほどなくして、Gearをソウマに返す女性。

「はい。登録は完了です。これで晴れてキミも、コーディネーター
としての一步を歩き出しました。」

Gearをソウマに返し、受付嬢は笑顔でそう言う。

それを受け取り、ソウマはカイナのコンテスト会場を後にした。

コンテストはジムと違い、スタート地点とゴールが決まっている。カイナは参加登録をしているが、コンテストのスタート地点ではない。ゆえにソウマが今ここでコーディネーターとして出来る事は登録しなかった。

「さてと。ハクリでも迎えに行こうかな・・・。」

「もう、ここに居ますっ！」

コンテスト会場を出て、ソウマがそう言うと、目の前からハクリの声が聞こえる。

コンテスト会場の前を陣どり、腰に手を当てて脹れっ面のハクリが居た。

「もぉ〜！行くなら行くって言ってよ！ソウマの分に買ったタコ焼き、ソウマが居ないから私が食べちゃったじゃん！」

全くの自業自得な事にハクリがソウマに対し怒り始める。

「そんな事知らないよ。僕には僕なりの旅の目的が有るんだし。それにハクリが勝手にどこかに行っちゃったんだし、どこに行くかを言う前に行っちゃったのはハクリだよ？」

事実を突き付けられて、さらに脹れっ面になるハクリ。いくなればハリセーンに近い。

「うるさい！とにかく今日の事はソウマが悪いの！」

「そ、そんな理不尽だよ！」

「罰として、今日の夕ご飯はソウマのおごりね。はい、決定！」

踵を返し、ハクリはポケモンセンターに向けて足を動かし始める。

「ええ！そんなの無いよ！！！」

そんなハクリを追いかけるソウマ。

前途多難な2人の旅。

そう、まだ始まったばかりの旅。それは果てしなく長い自分探しの旅。

何も無い。

闇も、光も。

星も、太陽も。

人も、ポケモンも。

風も、虹も、雨も、雲も。

ここを言い表すならば『無』

以前は神が根城にしていた神聖な場所。

しかし、神は神で無くなった。ゆえにここに真の意味で何も無い。

そんな空間に唯一ある命の原石。

何時孵化するのか分からない一つの卵。

どんな姿の命が生まれ、どんな命が生まれるのか、神の知らない。

そんな卵を見つめる、一人の老人。

しかし、その姿はまるで、映像のようにぼやけている。

「見えているのに手に取れず。そこにあると分かっているけど、部屋に入る術を知らない。しかし、そんなもどかしさも後、数刻。待っている、神が残した『破壊神』。すぐに私が貴様に体を与えてやる。

┌

卵に手を伸ばすが、老人の手が卵をすり抜ける。

そして、老人の姿はこの空間から姿を消した・・・

第八話 「真実を告げるため」

子供だけで過ごした初めての夜。

しかし、それはまるで修学旅行のような心境で事なきを得た。

夕食はハクリの横暴でソウマのおごりで済まされた。

言うまでもないが、ソウマは涙目だった。

しかし、今日の朝食は負い目を感じたのか2人の割り勘で支払われた。

温暖な地方のハウエン。日差しは優しいが少し熱い。

撫でる風は草木を静かに揺らす。

110番道路を歩くソウマとハクリ。

カインシテイにはジムが無いため、ハクリも一晩過ごしたただけですぐに町を出た。

「ん〜。ようやく私の冒険のページが刻まれるのよ！さあ、行くわよソウマー！」

背伸びをし、今の心境を高らかに叫ぶハクリ。

「ええ？僕達別々に旅するんじゃないの？」

「何言ってるの？一緒に旅した方がいろいろ楽じゃん。」

今更何を、と言った顔をしてソウマの発言をあざ笑うハクリ。

「だって、旅に出る前に『旅に出たらライバル』って言ってたじゃん。」

「ライバルと一緒に旅しちゃいけないなんてルール無いでしょ？」

「……先に言ってよ。」

「言ったつもりだったよ。」

ハクリの悪い癖、自分は言ったつもりだが、相手は理解していない。良く有る事では有った。

肩を落とすソウマ。

そんなソウマを、無視して青空を見上げるハクリ。

「ソウマみて！チルタリスの群れだよ！『渡り』の途中かな？」

「本当だ！すごいね。」

チルタリスの渡りを見上げる2人。

優雅に舞うチルタリス。群れと共に過ぎやすい地方に渡り歩くその姿を今更口にする魔でも無かった。

そんな風景に響く、カメラのシャッターを切る音。

カメラマンの横には、スケッチブックにチルタリスの渡りを描くドールブルが居る。

「ハクリ、あの人って。」

「うん。アルテスさんだ！」

カメラを構える人に駆けよる2人。

「アルテスさん！お久しぶりです！」

「……………すまん。今手が離せない。少し待ってる。……………
・ダブル、スケッチを怠るなよ。」

口を動かしながらのシャッターを切る事を止めないアルテスと呼ばれる人物。

彼がカメラを下したのはそれから30分後の事だった。

「待たせたな、ソウマにハクリ。……………何時ぶりだ？確か最後に有ったのは……………何時だ？」

「相変わらずですねアルテスさんは。」

「良く言われる……………」

ソウマに笑われるアルテス。

ラフな格好に、逆立った金髪。鋭い目つき。

手にしたカメラが無ければ、町に居る不良と間違われそうな雰囲気を出している。

彼の名は、アルテス・キャスパニア。

そう、クリアスの一人息子であり、去年旅にでた、ソウマ達の先輩トレーナーである。

「……………旅に出たのか。となると、昨日か？」

「そうだよ。昨日から私達はトレーナーになったんだよ。アルテスは、やっぱり記者の修業？」

小首を傾げ、アルテスに尋ねるハクリ。
小さくうなずくアルテス。

「……父さんやクロノさんとは違ったやり方で、世界を変えたくてな。皆が嘘の情報に惑わされない真実が書かれた新聞を作りたくてな。」

アルテスが目指すのはコーディネーターでもトレーナーでも無い。純粹に記者になりたいのが彼の目標だった。

クロノやクリアス。様々な人が築いたこの世界の姿を。彼らが残したものを、全ての人に知ってもらいた。そして、人に真実を告げたい。そうした彼の想いが記者への道を歩かせていた。

クロノ達、英雄には申し訳ないが、この世界の理不尽や嘘の情報は何一つ解決していなかった。

全ての情報が嘘ではない。しかし、政治的情報は隠ぺいされているのが実情である。

アルテスにはそれが我慢ならなかった。

「ね！アルテスさん！バトルしよ。バトル！」

「……藪から棒だな。」

「ねえ、良いでしょう！やろうよバトル！」

「……言いだしたら聞かない性格は健在か。まあ、良いだろ。」

そう言い、アルテスはカメラを仕舞い、バトルの準備をする。

「やリーー！」

嬉しそうに跳ねるハクリ。

「なら、僕がジャッジするよ。」

「……………頼む。」

そして、バトルが出来そうな広場に移る3人。

「さあ！私の初バトルよ！」

「……………さて、どこからでもどうぞ。」

十分な距離をとり、アルテスとハクリが対峙する。

「なら、私はザングースで行くわよ！」

空高くボールを投げる、ハクリ。

ボールから出るのは彼女の初めてのポケモンのザングース。

「……………ザングースか、久しいな。なら俺も相棒を出すか……………
アブソルいくぞ。」

そして、アルテスもボールを高く投げる。

アズソル。アルテスと一番長く付き合っているポケモンである。

「じゃ、バトルスタート！」

ソウマの合図を聞き、2人と2匹の目つきが変わる。

「先手必勝！ザングース、かわらわり！！」

アブソルとの距離を詰める、ザングース。
振り上げた、腕をアブソルに向けて振り下ろすが……

「……相手の出方を見てから動いた方が、良いと思うぞ。
アブソル、フラッシュ。」

一瞬、アブソルから発するまばゆい閃光。
閃光に目がくらみ、ザングースの腕は虚空を切る。

「……さて、こんな俺でも、来年のワールドリーグの挑戦権
があるトレーナーでな。ここからは本気で行かせてもらう。アブソ
ル、攻の型『無影』」

アルテスの指示を皮切りに、アルテスとアブソルのもっとも得意な
攻撃スタイルが作られた。

目のくらんだザングースを取り囲む、無数のアブソル。

「っ！影分身！？」

影分身より、下手に身動きが取れないザングース。

「……ただ影分身してるだけではない。」

無数の影分身の一体がザングースに突進してくる。

そんなアブソルにカウンターの一撃を食らわそうと攻撃するザングース。しかし、ザングースの腕は、アブソルの体をすり向け、アブソルのみがザングースに攻撃を与えただけの結果に終わった。攻撃を終えたアブソルは、攻撃を与えた瞬間にその姿を消す。

「……無数の影分身によるかく乱。攻撃のために近づくアブソルにカウンターを決めようとするが、アブソルには攻撃は効かない。これが俺とアブソルの編み出した、『無影』だ。」

攻撃と防御を兼ねた、戦闘スタイル。

アルテスはこの一年でかなり強くなった。

それからは、一方的な戦いだった。

ハクリもザングースも、打開策を講じたがアブソルに一撃も与えられなかった。

「……もう、良いだろ？と、言いたいが、お前達が諦める訳もないか。」

「もちろん！私もザングースも諦める事を知らないんだから！」

諦めない強さがハクリの強さであった。

「……そろそろ、ケリをつけるぞ、アブソル。」

ザングースに突進するアブソル。

「一か八か！ザングース！カウンター！！！」

アブソルの攻撃を受けるザングース。
しかし、ザングースの攻撃もアブソルに届いていた。

しかし、このバトルはアルテスの勝利だった。
倒れるザングース。アブソルは一撃をもらったが、依然と立っていた。

「……………まさか一撃をもらうとわな。恐れ入った。」

「うん。攻撃した瞬間だったら、攻撃が効くと思って。」

ザングースをボールに戻すハクリ。

「……………勘の良さは一人前か。」

ハクリのトレーナー初のバトルは、負けで終わった。
しかし、得るものは大きく、彼女の小さな胸には大きな期待と希望が、満ち溢れた。

「アルテスさんはこれから、どうするんですか？」

「……………そうだな。もうしばらく、旅をしたいと思います。家には帰らないと思うな。」

バトルを終え、アルテスに今後を聞くハクリ。

「そうですね。でも、旅をしているなら、また会えますよね。」

「……………ああ。いつかまた会える気がする。その時は、俺に勝

てるようになってみな。」

「次は負けませんかからね。」

「……楽しみにしてるさ。旅、気をつけるよ?」

「はい、ありがとうございます。」

そして別れる3人。

歩く道は違えど、心に宿す光は同じ。

2人と別れるアルテス。

先刻、撮った写真を確認しながら歩いていた。

その中の一つの写真を見て、足を止める。

「……また言えなかったな、アブソル。まあ、良さ。次に有った時にでも。」

カメラの画面に映っている物。

バトル中に撮影した写真。

映っている女の子の顔は楽しそうだった。今まで見た中で一番輝いていた。

「……さて、俺達もあの二人に負けないように頑張るか。」

そして、再び歩き出す。

信じた未来を、目指した道を歩いた。

第九話 「異変の前触れ」

デスクの上のキーボードを素早く叩くクロノ。

スーツに身を包み、今はウィールアスコーパーレーシヨンの副社長としての業務を果たしていた。

コンコン

ドアから聞こえる二度のノック音。

「どうぞ。」

PCに目を向けたまま返事をするクロノ

「失礼します。副社長、ワタル様がお見えになりました。お通ししてよろしいですか？」

「ああ、ここまで通してくれて構わない。それと、コーヒーを二つ。」

「分かりました。………珍しいですね、副社長がデスクに、ポケギアを置いておくなんて。」

部下の指摘を受けて、ようやくクロノはキーボードを叩くのをやめ、視線をずらした。

「なんだかんだ、御子息が心配なんですね。」

「ん？まあ、口では心配してないなんて言ってるけど、やっぱり心配なんだよな。」

ポケギアを手に取り、ハクリ達からの連絡が有ればすぐに取れるように、普段はデスクの上にはポケギアを置いてしまうクロノ。

「ま、親バカな男と笑ってくれて構わないさ。」

「誰も笑いませんよ。では、ワタル様をお通しします。」

そして、部下は部屋を出てワタルをクロノの部屋に通す。

「久しぶりだね、クロノ君。」

「お久しぶりです。………例の組織が動きましたか？」

クロノの問いに、軽くうなづくワタル。

「少し手が足りない。力を貸してくれ。」

「もちろん。」

しかし、このワタルとの共同戦線がクロノの最後の戦いに有る事を誰も知らない………。

110番道路を歩くソウマとハクリ。

すでに二晩を野宿しているが、そんな事旅に出る事を決めた瞬間から分かっていた事。

「ソウマ〜。あとどれくらいでキンセツにつくのお〜……。」「

これで何日目だろうか。今日だけで、ソウマはもうそんなハクリの愚痴を何度も聞いている。

「5分くらい前に、聞いたばっただよ。それに、一本道なんだから、もう着くよ。」「

ソウマの言う事は、真実だった。

110番道路の横には、サイクリングロードがあるが、二人はそれを断念して徒歩でキンセツまで向かっている。

クロノ達が旅したよりも遥かに、道は綺麗になり、大幅に道が短縮しているためである。

しかし、ポケモン達の配慮もなされている。

クロノ達が旅していた以前の道も残しており、新たに道を作ったためである。

しかし、その新しい道にも、草木は生えており、無論ポケモン達も息づいている。

そして、この短縮した新しい道は、三日も歩けばキンセツに着くほどののである。

そして、うつすらと見えてくるキンセツ。

「ほら、見えてきた。」「

ソウマが、後ろを歩くハクリにそう言うが……

ソウマの横を一陣の風が走る。

「お風呂おおおおおおお！……！……！……」

ハクリである。よほど、野宿で、入浴出来なかった事が嫌だったの
だろう。

キンセツに向かうハクリは風と呼ぶにふさわしかった。

「はあゝ・・・・・・・・。待ってよハクリ。」

そしてソウマもハクリの後を追って、キンセツに向かって走り出す。

第十話 「最後のバトル・家族のための戦い」 (前書き)

今回は新キャラが出ますが、名前を見れば誰がモチーフかなんてすぐに分かります

第十話 「最後のバトル・家族のための戦い」

入浴をこれほど気持ちよく感じた事はなかった。

「はあ〜〜〜。・・・。気持ちい〜〜。」

思わず口から洩れる自分の本心。浴槽につかりながらハクリは、久々の入浴を満喫していた。

ソウマとハクリが今いる場所。

キンセツシティのポケモンセンターの宿泊施設。

キンセツに到着してすぐにハクリがした事が、ポケモンセンターでの入浴だった。

ハクリが入浴している間に、ソウマは、2人分のポケモンをポケモンセンターに預けていた。

それから、一時間後にハクリが浴室から出てきた。

「はあ〜。入浴は人類が作り出した文化の極みだねえ〜。」

バスタオルを、肩から下げハクリがそう口にする。

「ハクリ、なんか親父臭いよ?」

「む!花も恥じらう乙女にそれはひどくない?」

ソウマの言葉に頬を膨らませるハクリ。

そして、部屋のベットに腰をかけ、二人は今後の事を話し合った。

「で、ハクリはこの後は、キンセツジムに挑戦？」

「うん。ソウマは、シダケタウンのコンテストに挑戦？」

「その予定。でも、ハクリがジム戦を終えてから。じゃなきゃダメでしょ？」

「分かってるじゃん。」

ソウマの言葉を聞き、ハクリは歯を見せて笑う。

キンセツジムの前に立つソウマとハクリ。

クロノが、ホウエンに来て初めて、挑戦したジムがこのキンセツジムだったと聞いている。

父親と同じ道を歩いていると思うと、ハクリは嬉しくてたまらなくなつた。

「うう~~~~~！ようやく私も、お父さんと同じ、土俵に立つたんだ！！燃えてきた！！」

よほど、クロノと同じ場所に立った事が嬉しいハクリ。

「なら、お父さんに負けないように、ハクリもがんばって。」

「うん！」

そして、ジム内に入る2人。

「いらつしゃい、小さな挑戦者。この門を潜ったという事は、ジム戦の申し込みかしら？」

ジムの門を潜った、2人の声をかける受付嬢。

「はい。キンセツジムのリーダー・テッセンさんに挑戦しにきました。」

受付嬢に近づき、ハクリがそう答える。

それを聞いた、受付嬢は素早く、パソコンのキーボードを叩き、ハクリの受付を済ませた。

「……はい。チャレンジャーハクリのジム戦を登録しました。バトルランクは1。今回が初めてのジム戦ですね。」

「はい。初めてのジム戦はここでって決まっています。」

初めてのジム戦のハクリに、受付嬢は丁寧に説明してくれた。

数年前までは、どの程度のレベルのトレーナーも、常に全力のジムリーダーと戦わなくてはならなかった。年々強くなるジムリーダー達を相手に、新人トレーナーが彼らを倒す事は年を重ねる度に困難になっていた。

そこで新たに設置されたのが『トレーナーのランク制度』である。新人トレーナーは誰でも初めは『ランク1』である。

そして、ジムリーダー側も、そのランクに応じたポケモンで対戦しなくてはならない。

そして、ジム戦に勝利したらトレーナーのランクは上がり、次のジム戦でのジムリーダーの使ってくるポケモンも強力になってくる。この制度の導入により、減少傾向にあったポケモントレーナー人口は再び、全盛期と同じほどに伸びた。

「分かったかしら？」

受付嬢の質問に対して、二つ返事で返すハクリ

「では、今からジム戦になります。チャレンジャーハクリはバトル用のリングに入ってください。」

「はい。んじゃ、ソウマ。私の華麗な戦いをその目に焼きつけなさいよー!」

「気をつけてよ。相手はジムリーダーなんだから。」

そして、ハクリはバトルフィールドに続く門をくぐり、ソウマは観客席へ向かう。

観客席は大掛かりな物が付いているのが全てのジムの共通点である。しかし、よほどの事がない限り、その席が満席になる事はなく、まして見ず知らず、赤の他人の試合を見るようなトレーナーは居ない。しかし、ソウマの他に2人の観客が居た。

赤い髪の少年と、帽子をかぶり、額にゴーグルをかけた少年が今から行われるハクリの試合を見ていた。

(誰だろう?)

ソウマのその感想は当たり前だった。

二人の知り合いではない人間なのだから当たり前前の反応であった

トレーナーサークルの立つハクリ。

対面には、杖をつきながら歩く小太りのジムリーダー・テッセン。

ここ数年、彼も年をとった。おそらくここ数年以内に、このジムリーダーは世代交代を迎えるとささやかれるほどに、テッセンは年をとった。

「ほっほっほ……。受付から名前を聞いた時はまさかと、思ったがまさかクロノ坊の子供とは。いやはや、ワシの最後の相手とわな

」

年甲斐もなく嬉しそうに笑うテッセン。

しかし、彼の放った言葉を聞き逃さなかったハクリ。

「最後って……」

「うむ。最近な。視力が落ちてきてな。満足にバトルができなくてな。今日のバトルを最後に、新しいジムリーダーにここを任せようと思っっている……。さて、少し無駄話が過ぎた。さて、はじめようか、チャレンジャーハクリ。ワシの最後の対戦相手よ。」

腰から、ボールを取り出すテッセン。

目をすぼめ、目の前のハクリをその眼に確かに焼きつけている。自

身の最後のバトルの対戦相手を。

小さく深呼吸をするハクリ。そして、テッセン同様に腰からボールを取り出し、自身の意思を確たるものにする。

『私の全力をテッセンさんにぶつける。それがテッセンさんに私から送れる精一杯の事』

そして、

「行きますテッセンさん!!」

「来い！チャレンジャー!!」

宙を舞う二つのボール。

そこから現れる、ポケモン達。

テッセンの先方はエレキッド。

対するハクリは、相性で有利なコドラ。

体格差と相性では明らかにハクリが有利である。

トレーナーランク1のルールはどのジムでも共通である

・使用ポケモンは2体。手持ちが全て戦闘不能になったトレーナーの負け。

・チャレンジャーのみバトル中のポケモンの交換が可能

これが、ランク1のジム戦のルールである

「さて、先攻は頂こうかの。エレキット、『かわらわり』！」

刹那、コドラとの距離を詰めるエレキット。

流石に小さいだけはある、足は速い。

「コドラ、『ドラゴンダイブ』！」

エレキットの拳とコドラの鋼の頭部がぶつかりあう。

しかし、後方に吹き飛ばされたのはエレキットの方だけであった。

「コドラ、追撃！』のしかかり』！」

ハクリの指示を受け、4本の足の力を使い、宙に舞うコドラ。

そして、着地点には仰向けになって倒れるエレキット。

しかし、そこはジムリーダー。そんなことは読めていた

「あまいぞ！エレキット、『守る』！！！」

刹那・エレキットから発する力場。その力場によって、空中のコドラは阻まれ、吹き飛ばされる。

しかし、空中で体制を整え、土煙を上げ地面に着地する。

何時になく本気の、ハクリの試合を見て、ソウマも自分の事のように

に熱くなっていた。

「……………茶番だな。俺はもういくぞ。」

「おい、待てよギンジ。」

赤い髪の少年が、ハクリのバトルを罵り、席から立ち上がり、その隣に座っていた帽子の少年も慌てて彼の後をついていく。

（一生懸命のハクリのバトルが茶番！？）

赤い髪の少年の言葉がソウマの心に矢を刺した。
ソウマの後ろを通る赤髪の少年。

「ちょっと待ってください。」

その少年に声をかけるソウマ。立ち上がり、少年の背を強く睨みつける

「彼女の、ハクリの試合の何が茶番なんですか。あんなに頑張っているのに。」

「……………そう言えば、英雄クロノの子供は双子という話だったな。となるとお前がそのもう一人か。」

ソウマの質問に答えず、赤髪の少年は別の問題の答えを出していた。

「そんなことはどうでもいいです。僕の質問に答えてください。」

そんな二人の間に割って入る帽子の少年。

「あ。ワリいな。こいつ口が悪くてな。俺が変わりの謝るからこはひとつ、な？」

両手を合わせて謝る帽子の少年。
しかし、

「謝る必要はなぞ、コガネ。……貴様の問いに答えてやる。茶番だから茶番といったままで。あの程度の実力で、英雄の子供と、良く胸を張って言えたものだ。と言う意味だ。満足か？」

「おい、ギンジ！言いすぎだぞ！」

ギンジと呼ばれる赤髪の少年に怒鳴るコガネと呼ばれる少年。

「なら、君はそんなに強いのか！人を貶せるほど強いのですか！」

人を怒鳴る事をしないソウマが初めて人を怒鳴った。
ギンジは、ソウマに三本の指を見せて、一言言った

「今のテッセンなら、俺は三分も有れば余裕だ。貴様ならば……一分で済む。」

三本指の内、2本を下げソウマに言い捨てる。

「……なら、僕が一分以上耐えければ、さっきの言葉を取り消してください。」

「良いだろう。もし貴様が一分以上持てば、さっきの言葉は取り消してやる。もし俺に勝てれば、土下座でもなんでもしてやる。」

人を憎んだ事が無い、ソウマが初めて人を全力で憎んだ瞬間だった。

第十話 「最後のバトル・家族のための戦い」 (後書き)

はい。新キャラのギンジとコガネ。

漢字変換すると・銀二・黄金。

シルバーとゴールドです。わー安直 (棒読み)

第十一話 「荒れ狂う蒼」(前書き)

ソウマ暴走編

第十一話 「荒れ狂う蒼」

ジムの外にある練習用のバトルフィールドに彼らは居た。
審判用の高台にはコガネが立ち、向かえ合わせに立つソウマとギンジ。

「約束は守ってもらいますよ。」

ギンジを睨みつけ、先刻の約束を確認するソウマ

「ああ。一分間持てば、さっきの言葉を訂正してやる。俺に勝てれば、土下座でもなんでもしてやる。」

腰に手を当て、少し顎を上げソウマを見下すように見てそう言い放つ。

そんな、二人を見るギンジ。

「んじゃ、ルールな。使用ポケモンは一体のみの一本勝負。良いな？」

「はい。」

「フルバトルでも良いがな。」

腰のボールを一個ずつ取る
そして、放たれるモンスターボール。

「いけ、ニューラ。」

「君の初陣だ！ヒトカゲ！」

ギンジはニューラを。ソウマは、このバトルが初めてとなるヒトカゲを出す。

ソウマのヒトカゲを見て、ギンジは少し驚く。

「蒼い炎の・・・ヒトカゲ。」

ヒトカゲの尻尾に灯る炎の色を見ての感想だった。

体色の違うポケモンは多数の目撃例がある。

中でも体色全てが白い個体『アルビノ』と呼ばれる種類の目撃例が最も多い。

しかし、体の一部のみが確認されている個体と違うのはとても珍しい。

例外にパッチールが居るが、それは単に『体毛の模様』の違いであり、『皮膚』や『体色』が違う訳ではない。

ソウマのヒトカゲのように、『炎の色』のみが違うのは極めて希と言えよう。

「へー、珍しいな。・・・まあ、良いや。んじゃ、バトルスタート!」

振り上げた腕を下ろし、ソウマとギンジのバトルが始まった。

「ニューラ、瞬殺してやれ。」

ギンジの命に従いニューラがフィールドを駆ける。

「ヒトカゲ、僕の言うとおりに避けて。」

ソウマを見るヒトカゲ。小さく頷き、駆けるニューラに目を戻す。

飛びかかるニユーラ。そして、重力を利用して爪を振り下ろす。

「右に避けて、『炎の牙』！」

紙一重で避けるヒトカゲ。そして、カウンターの炎の牙を食らわせる。が・・・

「フェイントだ！『電光石火』！」

ヒトカゲの炎の牙は、ニユーラの居た場所を噛んだだけで終わり、代わりにニユーラはヒトカゲの後ろに回っていた。

そして、今度のニユーラの攻撃はヒトカゲにクリティカルヒットした。

攻撃を当てて、ニユーラはヒトカゲとの距離を開ける。

「はい、残り50秒。」

ボケギアのストップウォッチ機能を使い、一分間を計測するコガネ。

しかし、ソウマはあまり危機感を抱いていなかった。

むしろ余裕すら感じていた。

何か違和感を感じていたギンジ。

さっきまで、おとなしい感じのソウマの何かが変わった。

何が？雰囲気か？俺に対して怒っているからか？いや、そんな簡単なものじゃない。

（時間をかけては不利か・・・）

そう、頭で感じたギンジ。

しかし、そんなギンジの心境を、ソウマは……

「『時間をかけては不利か……』そう考えているでしょ？でもね。そんな単純な事じゃないよ？」

ギンジの考えを口にするソウマ。

「……！」

心境を一字一句間違えは無く良い当てられ、驚くギンジ。

「……どんなトリックかは知らないが、良い気になるなよ！」

攻め手に回るニューラ。

「……『電光石火』から、『シャドークロー』……。後ろから攻める癖……。なら、」

(俺の考えてる指示を読み当てた！？)

しかし、ニューラは日ごろの戦いの癖を着実に実行していた。

ソウマの読み通りに、ニューラは『電光石火』でヒトカゲをかく乱し、背中に回り、『シャドークロー』を振り下ろしていた。

「ヒトカゲ、『アイアンテール』！」

ニューラのがらあきになっている腹部に、ヒトカゲの『アイアンテール』が入る。

そして、『アイアンテール』を放つと同時にニューラの『シャドークロー』を避ける。

「の、残り30秒……。」

よろけるニューラ。

その隙を逃さないソウマ。追撃の命をヒトカゲに出す。

「ヒトカゲ、『炎の牙』から『アイアンテール』！」

無防備なニューラに襲いかかるヒトカゲ。

「なめるな！ニューラ、『猫だまし』！」

「そっちがね。」

ギンジの命を無視してニューラは、自分を叩き始め、千鳥足でふらつく。

「どっした、ニューラ!？」

「『威張る』。使うの分からなかった？」

さっきの攻防の中で、ソウマはヒトカゲに攻撃の命令だけではなく『威張る』の指示を出していた。

くそ！なんだこいつ!？

強い。今まで戦って来たどんなトレーナーより強い。

ジムの中で戦っている女なんか比べ物にならないほどに。

この実力なら英雄の息子つても領ける。

そんな、言葉がギンジの頭の中を駆けまわる。

「ヒトカゲ！とどめだよ！」

ソウマが、混乱するニューラにとどめを刺そうとするが・・・

「ちょっとソウマ！なにバトルしてるのよ！！私との約束破るつもりなの！？」

「あ・・・ハクリ。」

バトルの手が止まる。

胸にキンセツのバッチをつけたハクリが、目を吊り上げソウマに近づく。

そして、ソウマの頭に一発のチョップを入れる。

「つ~~~~~~~~！痛いよハクリ・・・。」

「うるさい！人との約束を破ったあんたが悪い！！・・・。その、キミもごめんね？大丈夫だった？」

反対側にいるギンジに謝るハクリ。

その、声で我に帰るギンジ。

握った拳が汗まみれになっている事に気がつく・・・。

「あ、いや、こちらから誘ったバトルだ。そいつをあまり責めないでくれ。・・・それと、悪かった。お前の事を弱いとか言って・・・。」

「。。。」

未だ混乱するニューラを戻し、そう言うギンジ。
それだけ言い、ギンジとコガネはバトルフィールドを離れる。

「……おい、ギンジ。」

ギンジの後ろを歩くコガネ。

「お前にも分かっただろ。あいつ、ソウマとか言う奴は……」

「ああ。あいつ、かなり強いな。」

歩きながら話すギンジとコガネ。

コガネの持つポケギアのストップウォッチのタイムは『1分01秒』

そう、ソウマはギンジの引いたラインを越えていた。

それだけでなく、あのまま戦っていたらギンジは負けていた……

「ソウマ・ウィールアス……。忘れないぞ。」

そう言うギンジ。

今日の敗北を、忘れないように自分を負かした相手の名を心に刻んだ。

第十二話 「虹が消えた日」

鼻歌を歌いながら歩くハクリ。その横を歩くソウマ。今彼らが歩いているのは、117番道路だ。綺麗な空気が、覆う道路であるため、道に咲き乱れる野花はどれも美しかった。

「いやー空気がうまいね。ね？ソウマ。」

「…………ハクリ、なんか親父くさ…………」

そう、言おうとしたソウマの口を手でふさぎ、鬼のような形相でにらむハクリ。

「なんか言った？」

無言で首を横に振るソウマ。そして、笑顔になるハクリ

「うんうん！そう、ソウマは何も言って無いよねえ。」

そう、話すハクリ。

しかし、ソウマの顔は名前のように青くなっていく。手足をばたつかせるソウマ。

そう、ハクリがソウマの口と共に鼻を押さえているからだった。

「あ。ごめんソウマ。」

そしてようやく手を離すハクリ。
危うく、ソウマの旅がここで終わるところだったのは、言うまでもなかった。

そして、2人がついた町
シダケタウン。

117番道路のように、澄んだ空気の町であり、ポケモンコンテストの始まりの場所でもある。

「さー！ソウマ。次はソウマが頑張る番だよ！」

ソウマの背中を押すハクリ。

「うん。ハクリがジム戦を勝ったみたいに、今度は僕がコンテストに優勝してみせるよ！」

そして、向かったコンテスト会場。

そこで、ソウマとハクリは思わぬ人と出会った。

「お父さん！」

ソウマが、指を指した先には、クロノがワタルと一緒に居た。

「ん？おう！ソウマ、ハクリ。久しぶりだな。」

手を挙げ、2人に合図をするクロノ。

そして、クロノに駆け寄り、抱きつく2人。

「お父さん。どうして、ここに居るの？」

クロノの顔を見上げるハクリ。

「ああ。ワタルさんと一緒に任務だ。最近、ガラの悪い奴らがうるうるしてるみたいだからな。今は、情報収集中だ。そう言うお前たちには？」

ハクリの頭をなでるクロノ。

「僕がコンテストに参加するためだよ。」

「お！今からか。でもな、ソウマ。今日はもう、明日の受付しかしてないぞ？」

「「ええ〜〜〜！」「」

2人の声が重なり、残念な悲鳴をなつた。

「はっはっはっはっ……。まあ、そういう時もあるさ。とりあえず受付でもしとけ。……今日の晩御飯は一緒に食つか？」

笑いながら、2人に話すクロノ。

「わーい！お父さんと一緒に御飯だ！」

「やったー！」

クロノから離れて、喜ぶ2人。

「んじゃ、ポケモンセンターで待ち合わせな。お父さん、もう少し聞き込みしてくるから。」

ハクリ達に背を見せ、クロノはワタルと共にコンテスト会場を後にした。

コンテスト会場の外

「……子供が居ると、少し危ないな。」

「ですから、ポケモンセンターに隔離します。」

そして、歩いていくクロノとワタル。

「なるほど、そういう訳か。」

顎に手を当て、頷くワタル。

「それより、あいつらはここに居るんですね。」

「ああ、確実に。今日中にこの搜索は終わらせないと、また見失う事になる。」

「分かっています。」

そう、言つとワタルとクロノは二手に分かれ町の聞き込みを行った。

その日の晩御飯は、実になぎやかだった。

特にソウマとハクリはひと際騒がしかった。

「そうか、ハクリはテッセンさんに勝ったのか。すごいな。」

「うん！すごく強かったよお。」

そして、今日の夜が更けていった。
無論、ソウマとハクリも床に伏せていた。

「……さて、行きますか。」

静かに部屋から出ていく、クロノ。

部屋の外で待っていた、ワタル。

「おそらく、カナシダトンネルだ。急ごう。」

「分かりました。」

そして、2人はポケモンセンターを出ていった。

「さあ、早く作業を終わらせなさい。英雄が私たちの事を嗅ぎまわっているみたいですからね。」

カナシダトンネルの入り口で何人も人間に指示を出す一人の女性。ポケモン達を使つての作業のためか、物音は静かである。

「バシャーモ！フレアドライブ！」

そんな、連中のだ真ん中に突っ込むクロノのバシャーモ。無論、相手のポケモンもトレーナーも気を失うほどの威力である。

「あら？もう来てしまいましたの？」

振り向く少女。

彼らの後方には、クロノとワタルが立っていた。

「よつやく掴んだぞ。貴様らの尻尾。」

「これで鬼ごっこはお終いだ。」

睨むように少女を見るクロノとワタル。
しかし、少女は余裕の表情をだった

「あらあら。そんな怖い顔をしないでくださいな。せっかくのお顔が台無しですよ?」

「貴様に心配される筋合いはない。」

「あら、つれない事をお言いになりますね?」

そう、言い少女は一つのモンスターボールを取り出す。

「私も簡単に捕まる気はありません。……では、みなさん。参りましょうか。」

少女は自分のボールを高く投げ、そのボールを左の指先で受け取る。そして、そのボールを腕をつたい伸ばした右の指先に送る。
少女のその姿はまるで、新体操の演技に似ていた。

そして、クロノとワタルの周りを彼女の部下たちが取り囲む。

「では、英雄とチャンピオンの技量。見させていただきます。」

月明かりに浮かぶ、少女の笑顔。無垢なるその笑みには邪念を感じる事は出来なかった

「ん……………あれ、お父さん？」

ベットから起き上がるハクリ。

隣にはソウマが小さな寝息を立てて眠っている。

ベットを出て、カーテンの外を見てみるハクリ。

外は真夜中。

しかし、カナシダトンネルの付近で、小さな光が点いたり消えたりしているのが見えた

「なんたるあれ……………」

それを見た時、ハクリはクロノが言った事を思い出した。

『最近、ガラの悪い奴らがうろつろしてるみたいだからな』

そして、ハクリの目が完全に覚める。

「起きてソウマー!!」

寝ているソウマを揺すり、強引に起こすハクリ。

「ん……………なあゝに、ハクリ？」

「起きて！悪い人たちがカナシダトンネルでなんかしてる!!」

それを聞くと、ソウマも飛び起きる。

「えー！どう言う事？」

とりあえず、トンネルまで行こう！！」

そして、2人はドアを開けようとするが、ドアが開かない。
廊下側から鍵をかけられているようだ。

「ドアがダメなら……！」

「窓からだ！！！」

踵を返し、2人はモンスターボールのついたベルトのみを持って、
窓を開け、ベランダから飛び降りる。

流石に3階の高さから飛び降りる訳ではなく、ソウマのエアームド
を使ってゆっくり下りた。

地面に着地し、カナシダトンネルまで駆ける。

トンネルにたどり着いた2人の間の前に広がる景色。

「ワタルさん!!」

「君達!!危ないから下がってなさい!!」

ワタル1人が、無数の敵とバトルしている光景だった
しかし、そんな光景の中にクロノの姿は無かった。

「お父さん!!」

カナシダトンネルの奥に、灯る光を見つけるハクリ。

「お父さんはトンネルの中!ソウマ!!」

「うん!!」

そして、2人はワタルの忠告を無視して、カナシダトンネルの奥に
駆けていく。

「待ちたまえ2人とモ!!」

そんな2人を追おうとするワタルだが、その行く手を阻む敵のポケ
モン。

「クソ!どけ!!」

そんな敵をなぎ払うワタル。

しかし、防御重視の戦いをする敵に苦戦する現状だった

片膝をつく少女を前に、クロノがバシャーモと共に立つ。彼女の手持ちであるゴウカザルもすでに戦闘出来る状態ではなかった。

「大分てこずらせてくれたが、もう無理だろう。……おとなしく掴まれ。悪いようにはしない。」

諭すように話すクロノ。

「ふふふ……。流石に強いですね。英雄の肩書は伊達ではないみたいですね。ですが……。」

少女が何かを言おうとした時、洞窟に響く声。

「お父さん、大丈夫!!」

振り向くクロノ。

「お前達！何で来た!？」

刹那

「さようなら英雄さん。」

クロノの後ろで、少女の声が響く

それと同時に、ハクリ達の真上のコンクリートが爆発する。

「!!!!!!!!!!!!!!」

ハクリ達のもとに駆けるクロノ。

爆音と土煙がカナシダトンネルを包む

「つ……………」

身を起こすハクリとソウマ。

自分の頭上が爆発したのに彼らは少しの切り傷だけで済んだ。

しかし、自分たちが立っていた場所にはガレキで出来た壁が出来ていた

「お、お父さん!？」

ガレキの壁を叩き、ソウマとハクリはクロノのを呼ぶ。

『ソウマ、ハクリ。無事か?』

壁伝いに聞こえるクロノの声。
それを聞いて2人は安心した

「お父さんは大丈夫?」

『ああ。でも、ガレキに足を挟まれて動けない。ポケモンも出せる幅も無いから自力での脱出は出来ない…………』

「なら、私たちが!」

ハクリは自分の腰のボールを取り出し、そう答えるが

『待てハクリ。素人が下手に手を出すと、ガレキが崩れる。ワタルさんと呼んできてくれ。』

「でも……」

『頼む。ガレキの山も何時まで持つか分からない。早く呼んできてくれ』

「……分かった！待っててねお父さん！！」

そしてソウマとハクリはワタルを呼びにトンネルを駆けだす。

2人の足音を聞き終えクロノは安堵のため息を吐きだす。

咄嗟にバシャーモをボールに戻し、手持ちのポケモン達は無事である事は確認できた。

しかし、

「流石に……慣れない嘘はつくもんじゃないな……」

大量の汗を吹きだすクロノ。

そして、下半身から汗とは違う液体が服に染み込んでくるのが分かる。

それに比例して、意識が遠のいていく。

今のクロノには足が無かった。

いや、正確には『押しつぶされた』

先刻の爆発で、崩れたガレキによってだ。

いや、足だけではない。

無数のガレキが、彼の背中に突き刺さっている。

「じりゃ……もう無理……か……?」

出血が止まる気配がない。

咄嗟に自分が危ない状況である事を理解した

「でも……死ねないな……あいつらの……子供……
……見て……な……いし……」

そこで、クロノの意識は飛んだ。

それを見届けるかのように、カナシダトンネルは全て崩れた……
……

寝付けない夜は何時ぶりだろうか？

そう、アカネは思っていた。

窓からアルトマーレの海を見て、クロノの無事を祈っていた。

「ふふふ……。杞憂よね。あの人は、変わらない笑顔で戻ってくるのに。」

そう、何時のののようにクロノが帰ってくる。

アカネはそう、思っていた。が

少々乱暴なノック、そして、部屋の主の返事を待たずに扉が開く。それと同時に、メイドが一人。慌ただしい様子でアカネに告げる

「奥様!!!クロノ様が!!!」

メイドの報告を受け、アカネの顔から安堵の色が消える……

主のいない部屋。

しばらく誰も入って居ないため、少し冷めた部屋。

机の上には、彼の家族の写真が飾ってあった。

しかし、その写真立てが机から落ち、音もなくガラスは割れる。

ガラスの破片は、写真に刺さる。

まるで何かを告げるかのように……

第十三話 「英雄の別れ・小さな決断」

今、この場に居る全ての人の心は沈んでいた。

ある者は泣き崩れ

ある者は現実を否定して

ある者は彼の冥福を祈って

この日のアルトマーレの日差しは強く、それがすごく煩わしく思えた……

もう二週間も前になる……

「ソウマ！早くワタルさんのところに行こう！……」

「うん!!」

暗いカナシダトンネルを駆けるソウマとハクリ。
先刻、クロノが2人を守りガレキの中にとじ込まれた。
そして、2人のワタルを呼んできてほしいと、頼んだ。
ソウマ達はその願いを果たそうと、必死だった。

カナシダトンネルの入口を背にして戦うワタル。

長時間の持久戦を繰り返しても、彼のカイリユートのダメージは軽度だった。

それも、彼らの技量が高いからでもあるが、何より敵が『守る』や『見きり』などの守りを重視した技を多用し、攻撃の手が薄いからでもあった。

(こいつら・・・何が目的でここに来た？俺達が邪魔なら、数の力で押し退ければ早いのに、一向に攻撃に転じてくるそぶりが無い。何をたくらんでいる?)

そう考えるワタル。

そんな、ワタルを知ってか知らずが、カナシダトンネルからソウマ達の足音が響く

「ワタルさん!!」

「君達！無事か？」

2人の安否を確認するワタル

「僕たちは大丈夫です。でも、お父さんがガレキの中に閉じ込められて。」

「何！？そうか、さっきの爆発音はそう言うことか！しかし、この敵をどうにかしない事には・・・」

そんなワタルの杞憂はすぐに消えた。

敵が何かに指示されたかのように、逃げて行ったのだ。

「なんだ？・・・いや、今はクロノ君だ！」

敵が居なくなり、クロノの救助に向かおうとした瞬間。

カナシダトンネルは、その形を無くした・・・・・・・・

その後。

4日間の救助作業の末、クロノは助けられた……
冷たくなって……

クロノが入った棺が、彼の生まれ故郷の地に帰っていく……

誰もが信じたくなかった……
信じられなかった……
嘘だと言ってほしかった……

平静でいなくてはいけない、神父でさえ、クロノの死に涙を隠せなかった……

「この……バカ息子が……！親より先に……息
子たちの晴れ舞台を……見ないで生き急ぎおつて……
……！！！」

手で顔を押しさえ、そう嘆くケルア。

頬を伝う涙が、石畳みのアルトマーレの地を濡らす……

手に渾身の力を込め、友の死を悔やむクリアス。

「なんで……。貴方ばかりなんですか……。貴方が何をしたんですか……。」

なぜ、クロノばかりが辛い目に会うのか分からなかった……
彼が何をしたのか？

誰かを助けたい。それだけを思い、彼は動いていたのに……。

彼女の隣でソウマは泣いていた……

両手で涙を拭いながら……

そんなソウマの横に居る彼女は、何が起きているのが分からなかった……

私の……。せいなの？

私があの時、目を覚ましたから？

私が、ワタルさんの言葉を聞かなかったから？

私が、ソウマを起こさなかったらこんな事にはならなかったの？

私のせいでお父さんは……。

私が、お父さんを知る全ての人を悲しませたの？ソウマも、お母さ

んも、クリアスさんも、ミヨさんも。みんな、みんな、みんな。

私のせいで。私のせいで。私のせいで。私のせいで……

全部私のせいだ……

そんな言葉が、ハクリの心を渦巻いていた。

「ハクリ」

そんなハクリに声をかけるアカネ。

そして、彼女を優しく抱く。

「貴方のせいじゃないわ。だから、自分を責めないで。貴方は悪くないから。」

優しい母の声を聞き、ハクリも涙を流し始めた

「ごめん……なさい……。ごめんなさい……………」

何度も何度も彼女は謝った。

亡き父に。彼を知る全ての人に……………」

こうして、クロノの葬儀は幕を閉じた……………」

泣き疲れたのか、ソウマとハクリは真新しい涙の跡を残し、ベットの中で休んでいた。

客間に集う、クロノの旧友達。
クリアス、星、ミヨ。そしてアカネ。

「なんか、さびしいな。この場に、少年が居ないとさあ……………」
椅子に腰かけず、壁に身を任せる星が、そう話す。
何時もなら。つい、数週間前まで彼はここに居たのに急に居なくな
った……………」

「ええ……………。クロノ様は、みんなの『虹』でしたからね。彩り
を無くした、空は急にさびしく見えてしまえますね。虹が綺麗すぎ
るとなおの事……………」

無言の時間がこの客間を支配した……………」

「お……………父……………さん」

そう、寝言を言い、ハクリは目を覚ました。
起き上がり、当たりを見渡す。
隣で寝ているはずのソウマが居なかった。

まだ、布団は温かい。今さっき、ここから出ていった事は明白だった。

それにつられるように、ハクリも部屋を出た

初めにハクリが向かったのは、クロノの書斎だった。

少し、重く感じるドアを開ける

「どうした？ハクリ。眠れないのか？」

「お父さん！！」

思わず叫んでしまうハクリ。

しかし、書斎は暗く、静まり返っていた。

居るはずもいクロノを一瞬見た。

ハクリやソウマが寝つけに時は、決まってここに来た。

そうすると、クロノが何時も温かいココアを入れてくれた。

そうすると、2人は落ち着いた。

安心した。

クロノの書斎から、少し速足にでていくハクリ。

廊下を歩くペースは次第に速くなり、クロノが居そうな場所を必死に探した。

だが、いるはずが無かった・・・

そして、最後に着いたのが客間だった。

客間のドアを開けようと手を伸ばすと、ドアの向こうから話声が聞こえた

「アカネさん。．．．．．クロノ様が亡くなってから、一回も泣いていませんね。」

ミヨにそう、言われ、クリアスと星は初めて気がついた。

「はい．．．．．結婚した時、クロノのと約束しましたから。『俺の事で、二度と泣かないでくれ』って。クロノとの約束を、私が先に破る訳にはいきませんから．．．．．」

必死に笑顔を見せるアカネ。

誰よりも辛いのに、彼女はその辛さを必死に耐えていた．．．．．

「でもな、譲ちゃん。この、メンツの前だったら泣いても良いんだよ？誰もクロノには言わないからさ。一番辛いのは譲ちゃんなんだからさ。」

星のその、一言でアカネの我慢が崩れた。

笑顔のまま、その瞳から涙があふれ出た。

「．．．．．そんな．．．．．事言われると．．．．．我慢できないじゃないですか．．．．．。クロノとの約束．．．．．守れないじゃないですか．．．．．」

大粒の涙が、アカネの頬と伝い、彼女の膝にこぼれおちる。

「いいんですよ。今だけは、思う存分泣いてください。誰も何も言いませんから。」

クリアスのその優しい言葉で、初めてアカネが声を出して泣いた
両手で顔を隠し、声をあげて泣いた……

扉越しに初めて聞いた母の悲しみの声。

ああ、やっぱり私のせいなんだ……

そして、ハクリは客間を後にした。

部屋に戻り、着替えた。

荷物を持った。ベルトを腰に巻き、置手紙を書き、この家を出た……

潮の香りがするアルトマーレジムの観客席にソウマはいた。
ここが好きだった。

戦っているクロノが一番好きだった。

彼の横には、旅支度があった。

このまま、また旅に出るつもりで、ここに居た。

「お父さん……。僕、ハクリの代わりをするよ。」

そう、言いソウマは腰を上げ、ジムを後にした。

歩道を歩くソウマ。

そんな時。水路を挟み、反対側の道を走るハクリ。

「ハクリ？」

そんな、ソウマの声を聞きハクリは足を止め、ソウマを見る。

「ソウマ……。何してんの。」

「ハクリこそ……。」

2人は無言になった。

最初に口を開いたのはソウマだった。

「…………お父さんと戦ってた女のひとを探す気でしょ？」

ハクリは無言だった。
そして、続けて話すソウマ

「それは、僕がやるよ。ハクリは、家に戻っててよ。」

「……ヤダ。私がやる。」

「何ですよ？ハクリはもう、十分傷ついたでしょ？もう、休みなよ。
後は僕が……」

「ソウマに何が分かるのよ！！！！」

ソウマに怒鳴るハクリ

「私が、みんなを悲しませたんだよ！！全部私のせいなの！！だから、私がなんとかしなくちゃいけないの！！！！」

涙を浮かべ、そう訴えるハクリ

「違う！！ハクリだけのせいじゃない！！！！」

「違うくない！！全部私のせいなの！！！！」

「違う！！僕のせいでもあるんだよ！！！！」

「え？」

ソウマの言葉を聞き、口ごもるハクリ

「……あの時、僕がハクリを止めることもできた。なのに、僕

は無いもしなかった……。ハクリだけのせいじゃない。僕のせいでもあるんだ。」

ハクリにそう言う、ソウマ。
うつむくハクリ。

「……………一緒に」

「ん？」

「ソウマは、一緒に来てくれるの？」

「もちろんだよ！」

涙を流すハクリ。

「ありがとう……。ありがとう……」

2人の子供決意した。

自分の犯したはじめをつけるため。

人を悲しませたはじめをつけるために……

第十四話 「異世界と交差する道」(前書き)

ここからまた、プラネット先生とコラボしている内容になっています

第十四話 「異世界と交差する道」

大切な人を無くした人たちに許される事。
それは、ただ悲しみに沈む事だけだった。

それが今のアカネに考え付く事であり、それが今彼女自信を保つただ一つの方法だった。

そんな時だった。

客間のドアから聞こえるノックの音。

扉を開けたのは、一人のメイド。

顔色は決して穏やかな物ではなく、何かあったのであろうと言う事はここに居る誰もが分かっていた。

「奥様。あ……す、すいません。」

アカネが流している涙を見て、謝り部屋を出ようとするメイド。

アカネはそれを止めようとしますが、星とクリアスがそれを止め、代わりに2人が部屋の外でメイドの話聞く事にした。

部屋の外に出た2人。

そして、ようやくメイドから話を聞く事が出来た。

「どうしました？血相を変えて。」

クリアスの言葉を聞き、幾分か落ち着くメイド。

一呼吸置き、訳を話し始める

「はい。さっき、ソウマ様らしき人影をお庭で見かけたのですが、

こんな夜更けですし見間違いだと思ひまして。それからすぐに、廊下をハクリ様が駆けて行くのを見てしまい。もしかしたらと思ひ、お部屋を見たら、こんな手紙のみを残してお二人がいなくなつて・・・」

そう言い、メイドがクリアスに手紙を渡す。

それを受け取るクリアス。

そして、便箋の中身を見る。

中には、ハクリの文字で今の彼女の心境がつづられていた。所々文字が涙で滲んで・・・

『ママ。そしてパパの知り合いの皆さんへ。

ごめんなさい。私のせいで、パパをこんな目にあわせてしまい、皆さんにとても悲し想いをさせてしまいました。どんなに謝っても許される事ではありません。

私自信、今の私がつく嫌いでどうしていいか分かりません。私もお父さんと同じ目に会えば、みんなの悲しみが消えるならば、私はそれを受け入れます。でも、現実はそのような簡単なことではありません。

今の私に考え付く最善の方法で、私は今回の事へのけじめをつけたと思ひます。多分もうここには戻らないと思ひます。今まで育ててくれてありがとうございます。さようなら

ハクリ

より

そんな、手紙を読むクリアスと星。

「あの子は、そんなに気に病んでいたのですね。」

「……………クリアス。ミュウツィを貸してくれ。」

そう、話すクリアスに星が話しかける。

「ん？どうしたんです？急に？」

「探してくる。流石にアルトマーレ全体を探すには時間がかかる。ミュウツィの念で大方の場所を特定してその付近を捜す。何かあったら連絡する。」

しばらくの無言が続き、ようやくクリアスは星にミュウツィの入ったボールを渡す。

それを受け取り、出口に向かって歩き出す星の背中。

そんな背中に向けてクリアスが一言

「……………あの2人を主に……………いいえ、あの時のクロノに重ねていますね。」

「……………少年の歩いた道を追うような事はさせねえよ。ミヨ譲ちゃんにも言っといってくれ、なんかあったら連絡するって。」

後ろに向かって手を振り、星の背中が廊下に続く闇に消えていった。

波の音が響くアルトマーレの夜。

そんな、闇夜に吹く風になびく星の上着。

彼の横にはクリアスから借りたミュウツィが立っている。

「さて、頼むわ。ガキンチヨ2名、探せる？」

腕を組み頷くミュウツィ。

探す前に彼は少し想いに深けていた

「……こうしていると、19年前を思い出すな。あの時は敵同士で、貴様たち側には『異界の者』が居たな。」

「ん？あゝ。あん時ね。そうねえ、もうそんなに経つのかあ。あいつら元気かねえ？」

「さあな。……さて、探すでしょうか。」

そう言い、ミュウツィが腕を解し、両手を前に出し、瞳を閉じる。そして、両手に念を込め、この町に広がる人の念からソウマとハクリの念を探す。

そう、クロノに良く似た彼らの念を……

しかし、この町全体に広がる波紋がそれをぼやかせる。空間を超える時に発せられる時空の波紋が彼らのオーラを認知し辛くしている。

が、そんな中でも彼らの居場所の大本は分かった。

「……大まかだが分かったぞ。それと、少し調べたい事が出来た。2人に会う前に少し寄り道をするぞ。」

「……あんまり時間は無いぞ？」

「もしかしたら、懐かしい客人が来るかもしれないぞ？」

「……噂をすればなんとやらってか？」

そして、星の服の襟を掴み宙に舞うミュウツー。

向かうは、時空の波紋の発生地。

幸い、ハクリ達のいる場所へ向かう時に通るルート上だった。

夜のアルトマーレの町。

そんな、町の家屋上に時空の波紋の発生地があった。

19年前にも同じ事が起きていた。そう、『異世界の者』と呼ばれ、クロノと旅をした『彼』がここに来た時に一度起きた波紋

そして、空間がねじ曲がり、異世界との通じるゲートが開く。

歪んだ空間の中は、黒く、全ての事象が全ての摂理を無視して起きている。一歩間違えば、本来の形を失うかもしれないほど危険な道。そんな、道を通り、彼らはここに来た。

一人は全身を隠すほどのローブをかぶり、自身を隠していた。

もう一人はポケモンだった。一匹のルカリオ。おそらくローブの者の知り合い、もしくは彼のポケモンなのだろう。

「……あまり良い賭けでは無かったが、今回もこの世界に転移できたな。……四肢に異常は無い。貴様はどうだ？」

彼は横に立つルカリオに問いかける。

ルカリオは適当に手足を動かし、異常が無いのを確認して、ローブの者を見る

「そうか、なら良い。」

そして、辺りを見渡す。

見渡す限りの町と、闇夜から響く波の音。

刹那。

ルカリオが上空を見上げ、身構える。

そして、ローブの者も上空に視線を向ける。

上空から下りてくる星とミュウツィー。

星は、ローブの者を見ると、少し驚く

「貴様。……異世界の我。いや、シャインと呼んだ方が良いか。」

そうミュウツィーがローブの者を呼ぶ。

ローブの者・シャインの横にて身構えるルカリオは驚きを隠せず、シャインとミュウツィーを交互に見る。

そして、星はローブの者が以前旅をしたシャインである事を確信して、普段通りの口調で話始める

「へえ〜。またお宅に出会えるとはねえ〜。おしさし、シャインの

旦那。」

手を挙げ、軽めの挨拶を送る星。
それにローブの者も答える

「ああ。・・・半年ぶりだな。」

その言葉を聞き、星とミュウツーは少し驚く様子を見せる

「ん？半年？」

「19年前の間違いではないのか？」

そう口々に話す星とミュウツー

少し悩むシャイン

「なるほど。我々の世界と、この世界では時間の流れに差がある
ようだな。・・・御幣が無いように言わせてもらう。少なからず我
々の世界では、貴様と旅したのはほんの半年前の話だ。」

そんな話をしていると、シャインは横に立つルカリオに視線を向ける

「安心しろ。こいつらが以前共に旅した『この世界の知り合い』だ。
少なからず敵ではない。」

そう言い、ようやくルカリオは身構えるのをやめた。

「何その子？お宅のポケモン？」

ルカリオを指差す星。

「……仲間、と言った方が正しいな。」

そう、言うシャイン。

「あつそ。んじゃ、俺ら急いでるから。ミュウツー、もう良いか？」

「ああ。……異世界の我よ。今回は何をしに来たかは知らないが、ここではあまり暴れない方が良い。」

そして、シャインに背を向ける2人。

「待て。最後に聞きたい。クロノは今どこに居る？」

2人の足取りが止まる。

何も答えない2人。

「それだけ教える。そうすれば、今回の目的の大半は済む。」

「……もう……いねえよ。」

小さく答える星。

しかし、シャインには聞こえなかった。

「星、今なんと言った？もう少しはつきり話せ。」

「少年は……死んだよ……。この前な……。」

「……冗談にしては笑えんな。」

再び無言が続く。

代わりに答えるのはミュウツーだった

「本当の事だ。自分の子供達を守ってこの世を去った。……墓参りがしたいならば、あの大きな鐘のある建物を目指せ。そこにクロノは眠っている。満足か？」

協会の鐘を指差すミュウツー。

そして、歩き出す2人。

しかし、シャインが再び2人を止める

「待て。さつき、子供を守ってクロノは死んだと言ったな。……あいつは子供を作ったのか？」

「ああ。……俺たちは家出したクロノの子供たちを探してる最中に、偶然お前たちに会ったんだ。」

しばらく考えるシャイン。

「異界の我よ。クロノの子供の念は、クロノに似ている物だな？」

「ああ。しかし、お前たちが時空転移をしたため、少し探すのに手間取っている。」

そして、シャインの周りの空気が張り詰めていく。

ほどなくして、張り詰めた空気は元通りのなり、再びシャインが口を開く

「見つけた。こっちだ。」

「本当か!？」

「冗談は好かん。早くしろ。」

屋根の上をルカリオと共に飛んでい行くシャイン。

その後が続いて、ミュウツーに襟を掴まれた星が続く。

船着き場に、ハクリとソウマは居た。

しかし、こんな時間に出向する船は無く立ち往生しているのが現状だった。

「どうするハクリ？」

ハクリに問うソウマ。

ソウマの手持ちの中で唯一飛行できるのは現在エアームドのみ。

ヒトカゲもリザードンに進化すれば2人を乗せて飛行は可能だが、今すぐに進化は無理な話である

逆にハクリの手持ちで海を渡れる可能性があるのはワニノコのみ。

しかし、ハクリ一人ならばヨットを引いて休み休み海を渡る事も可能だがそうになると、2往復する羽目になり、結果として朝まで待ち船を拾った方が早くなってしまう。

逆に、ソウマのエアームドとハクリのワニノコを使ってヨットを引くという手もあるが、肝心のヨットなりの船が無い。

結局のところ、今の2人にはこの海を横断する術が無かった。

「何か他のも手が有るはずよ。考えて。」

必死に考えるハクリ。

こんなところで立ち往生してる暇は無い。

こうしている間にもクロノの敵はどこかに行ってしまう。

あまりにも時間がたってしまつと、2人には追えなくなってしまう。
それだけはなんとかしたい。

「おードンピシャ！流石はシャインの旦那！惚れちゃうう〜！」

「……その減らず口を閉じないと、首から上を消し飛ばすぞ？」

「……自重します……。」

そんなやり取りが響くやり取り。

ソウマとハクリにはなじみ深い声と全く知らない声。

振り向く2人。

後方には、星と何度かクリアスが見せた世界で一匹しかいないポケ
モン・ミュウツー。

その横には、怪しいローブを着た人物とその手持ちと思われるポケ
モンのルカリオ

「星……さん！」

「ほれ、お二人さん。家に帰るぞ。みんな心配してるから。」

首を横に振る二人。

「できません。お父さんを死なせたのは私たちのせいだから……。」

「で、ケジメとつけると？その、方法が復讐と？」

「……はい。」

顔色が変わる星

「ふざけんな！！まだガキのお前たちが気安く復讐するとか言ってるじゃねえ！！クロノがそんな事いつ望んだ！！」

「私たちは真剣です！！生半可な気持ちで復讐なんて口にしません！！でも、他に皆さんに償える方法が分からないんです！！」

肩を震わせるハクリとソウマ。

二人の覚悟は本物だった

だからこそ曲がらない信念を持っていた。

「……頑固なのはクロノ譲りか。なら、力づくで連れて帰る。怪我の一つや二つは御愛嬌だぞ？」

星の前に出るミュウツィー。

しかし、そのミュウツィーと止めるシャイン。

「……任せる。」

「貴方は？」

ハクリの問いに答えるシャイン

「昔貴様の父親と旅をした者だ。お前たちがどれほどの決意を持ってここに居るのか見せてもらうぞ。」

そして、空気が張り詰める。

足が震えだす二人。

今までに感じた事のない空気。

今にも膝を付きそうな程、今の二人は目の前の人に恐怖を感じていた。
だが、

震える足を押さえ、腰からボールを取りだす2人。

「償い終わるまでは……………」

「うん……。止まらない！」

そして、ボールからポケモンを出す2人。

ヒトカゲとワニノコ。

「さ、さあ！貴方もポケモンを出しなさい！」

シャインに指を向けるハクリ。

しかし、首を横に振るシャイン

「生憎、ポケモンは持ち合わせていなくてな。だが、遠慮するな。」

単身でも貴様らの相手は十分すぎる。」

「馬鹿にして！生身の人を攻撃できると思ってるの！？」

刹那。

目の前のシャインの姿が消える。

「へ？」

すると、後ろから声が聞こえてくる

「すでに二回、お前たちはやられてるぞ？」

「！！！！」

後ろを振り向く2人。

そこには、今まで彼らの前に居たはずのシャインが立っていた。

「これでも戦えないか？」

刹那で彼の実力が視界出来た。

そして、彼が人で無い事も十分に理解出来た。

「良いわ。怪我しても知らないから！！ワニノコ！！」

ハクリを避けて、シャインに飛びかかるワニノコ
しかし・・・

「踏み込みも、攻め方も全てが甘い。」

それを余裕で回避するシャイン。

それを追撃するソウマのヒトカゲ

「ヒトカゲ！ドラゴンダイブ！」

しかし、これもいとも簡単に回避するシャイン
そして、距離を取る

「なるほど。力で敵わないなら、数の優位性で攻めてくる、か。悪くない。が、しかし。敵の力が圧倒的に上回っていたらどうする？」

そう問うシャインだったが、足に異変が起こる

いや、正確には脳である。

少しだが、足がふらつく

「ほう……。『混乱』か。」

「はい。『ドラゴンダイブ』は罠です。本命は、貴方を『威張る』で混乱させる事です。剛を制するのは柔。お父さんが教えてくれた事です！」

ロープ越しに笑うシャイン。

しかし誰にもそれは話からに事だった

「少々、侮りすぎたか。仮にも貴様らはクロノの子供。奴の強さの一部を受け継いでる訳か。」

「貴方を倒して、僕たちは先に行きます！！ヒトカゲ！！」

駆けるヒトカゲ。

今回はシャインも真っ向から受けて立った。

しかし、圧倒的だった。

攻撃のリーチ

力量

場数を踏んだ実戦経験の差

全てがソウマ達の上を行っていた。

ポロボロのワニノコとヒトカゲ。

いくらシャインが手加減をしているといっても、一方的すぎる戦いだった

「ヒトカゲ・・・!」

ヒトカゲに寄り添うソウマ

同様にワニノコに寄り添うハクリ

「どうした?もうお終いか?」

ローブに傷すらつけられず、一方的に攻撃を受け続けたヒトカゲ達

2人は必死に考えた。

今の状況を打開するには?

他のポケモンを出す?

いいや。きつとヒトカゲ達と同じく、一方的にやられる。

今のこの人にはどう足掻いても勝てない・・・

そう、二人の頭に過った

「僕たちの……負けです……」

そう、シャインに告げるソウマ
悔しそうにハクリも頷く

「貴様らの掲げた覚悟はそんなものか？その手度で、クロノの敵を取ろうというのか？」

その言葉を聞き、シャインが2人を叱咤するように言葉を放つ。

そんな、シャインの言葉を聞き、ワニノコとヒトカゲが2人の手を払いのける。

そして、ゆっくりとシャインの目の前に立ち、戦う姿勢を止めなかった

「……貴様ら。このポケモン達を見て何も思わないのか。主を守ろうと、主の決意を守ろうとするこいつらの姿を見て、なおも目的を、掲げた信念を捨てられるのか？」

そんな、シャインの言葉を受け、立ち上がるソウマ。

そして、ヒトカゲに向けて叫ぶ

「……お願いだヒトカゲ。もう少しだけ僕に力を貸して。僕の掲げた目的のために。前に進むために！少しだけ！もう少しだけ僕に力を貸して！！」

刹那、

ヒトカゲを光が包む。

「おいおい！このタイミングで『進化』かよ！？」

後ろで見ていた星が驚く。

あまりにもタイミングが良すぎる進化。

そして、ヒトカゲにしては早すぎる進化

光を突き破り、シャインに突っ込むヒトカゲ。

否。ヒトカゲの空を破った者・リザード。

鋭くなった爪でシャインに襲いかかる。

「ヒトカゲ！ううん！！リザード！大技行くよ！！！」

そして、炎に包まれるリザード

「『フレアドライブ』か。いいだろ。こちらも最高の技で迎え撃とう！！！」

そして、シャインの周りに大きなエネルギーが集まり始める。

「『フレアドライブ』！！！」

「ダークブラスター！！！」

ぶつかり合う炎とエネルギー。

しかし、この勝負はすでに決していた

水平線を照らすシャインのダークブラスター。

進化したてのリザードなどにそれを吹き飛ばすだけの力など無かつ

た。

地面に出来た溝に倒れるリザード。

「リザード！！大丈夫！？」

リザードを抱きかかえるソウマ

それに近づくシャイン

「……クロノとポケモンの信頼関係は、貴様たち以上の物だった。いついかなる時も、あのバシャーモはクロノを信じていた。たとえ友と戦う事になっても、揺るぎない物だった。貴様もそれに近づけるか？」

「そう有りたい。ううん！そんな関係になってみせる！！」

強い決意を見せるソウマ。

「……良いだろう。貴様たちの復讐に力を貸してやる。いや、貴様たちの目的を果たせるだけの力を我が身につけさせる。」

ソウマと同じ目線になるように膝をつくシャイン。

(似ているな。あの山で、正気に戻った時のクロノの目に)

彼らの時間で半年前の時。

最後に彼は本当のクロノの目を見た。

そして、今日の前にいる彼の息子の目は、そんなクロノの目に似ていた……

再び重なった2つの世界。

新たに始まった異世界の者との旅。

揺るがぬ決意を宿し、ソウマ達の旅は新たに進む・・・

第十五話 「水面下で蠢く者達」 (前書き)

大変長らくお待たせしました。
久々の更新です

第十五話 「水面下で蠢く者達」

まだ、誰もが床についている時。
時の鎖を断ち切られた食死鬼^{しよくしき}達は、動かなくなった骸を掘り起こしていた。

まだ、幼い顔の少年。

メガネをかけ、小脇に分厚い本を抱える男性。

そして、一人の少女。

そして、彼らの部下と思われる数人の人間達。

「……で。本当に頭部は新鮮なんだろうね？」

眼鏡をかけた男性が、横に立つ少女に問う。

「一応は、防腐剤は撒いといたし。それに、遺伝子の一部が有ればどうにでもなるし。」

後ろで手を組み、そう答える少女。

「……で、君はさつきから何、明後日の方角を見ている？」

墓場を見ている2人とは別の方角を見ている少年に問う眼鏡の男

「さつき、連絡が有ったでしょ？次元の壁に歪みが出来て、もしかしたら、何かが転移してきたかもしれないって。もしかしたら、19年前の異世界の住人が来たのかも知れないよ？」

それを聞くと、顎を擦り悩む眼鏡の男。

「・・・それは、興味深いですね。次元ではなく『異次元』を超えてくる者。調査すべき者ですね。」

「なら、僕が行くよ。」

2人から離れていく少年。

「大丈夫・・・って聞くまでもないか。」

「うん。伊達に『暴食』の名前はもらって無いよ。」

そして、少年は協会墓地から姿を消した。

そして、ここに響くのは、岩同士が擦れる音と、冷たく響く波の音だけだった・・・

少し魚臭い倉庫に2人は隠れていた。

「臭いね。」

「うん。魚臭いね・・・」

ソウマとハクリはそう話、再び無言な時間が過ぎて行った。

先刻。

父と旅をした、と言う人と戦った。

圧倒的な力量差を目の前にして、負けて。最後には連れて帰られるかと思っただが、答えは違かった。

あの人は、2人に力を貸してくれると言ってくれた。

「・・・ねえ、ソウマ。あの時の約束。覚えてる？」

「うん。・・・『もう、僕はバトルしない』って約束。ごめん2回も破っちゃった。」

「良いよ。なら、新しい約束。今回の旅でソウマはサポートに回って。私が攻撃役になるから。」

「・・・分かった。極力、サポートに回るね。」

「極力じゃダメ!!絶対にダメ!!・・・もう、あんなソウマは見たくないもん!!」

ハクリの怒鳴る声が倉庫に響き、再び静寂が広がる。

そして、ソウマは頷き、ハクリに答える

「・・・分かった。もう、あんな事にならないように、僕はサ

「ポートに回るよ。」

「うん。」

そして、彼らのポケギアの着信音が鳴り響く。
相手は星からだった。

「行こうソウマ。お父さんの弔い合戦だよ！」

「うん！行こう、ハクリ！！」

そして、2人は倉庫から飛び出す。

外は闇夜を打ち消す、太陽が水平線から浮かび上がりつつあった・・・

第十六話 「目指すは前の珍道中」 (前書き)

大変長らくお待たせいたしました。
職業病が再発しまして、死にそうです

第十六話 「目指すは前の珍道中」

太陽が昇り、人々が活動し始める時間。

ソウマ達は、別れていた星達と合流し船着き場から少し離れた場所に居た。

堤防に腰をかけ、横目で港に止まっている船を見るハクリ。

無精ひげをさすりながら、ケラケラと声を殺し笑う星。

父と旅をしたという全身ローブを纏った者の横に立ち、複雑な表情を浮かべソウマ。

ローブの者を『かわいいそうな奴』といったような表情で見るルカリオ
ローブ越しに放つ殺気に似たオーラを放つローブの者・シャイン。

数時間前

船着き場にて合流したソウマ達と星達

「はいよ、お二人さん。話は付いたから、さっそく船に乗って行き
ましようか。」

「はい。・・・ところで、どこに向かって行くんですか?」

「それについては、船上で話すわ。」

そして、彼らは船に乗ろうとした。が・・・

「4人?と、一匹ですね・・・?」

「5人に見えるの、御宅には？」

船のチケットを買い、星が受付と話し、受付の係員が困惑した。星の後ろに居るローブの者・シャインの出で立ちを見て困惑したのは言うまでもない。

今のご時世、そんな自身の身を全て隠している人物は居ない。実に胡散臭い恰好であった。

「お客様、申し訳ありませんが、奥のお客様の乗船は・・・ちょっと・・・」

「あ、やっぱり？どうしてもダメ？」

「おい。星はさっきから何をしているのだ？」

少し離れた場所で、係員と話す星を見て、ソウマに話しかけるシャイン。

「船に乗る為の権を買ってるんですけど、さっきからチラチラこっちを見てますね。どうしたんだらう？」

「・・・まあ、察しはつくけど。」

そう、答えるソウマ。そんなシャインを横目で見るハクリ。

そして、戻ってくる星。とても晴々しい笑顔で

「ダメだった!!」

そして、事情を説明し、彼らはここに居た。

「いやー、まさかこんなオチになるとはなあ。意外や意外」

嫌みな笑いをこらえながら話す星。

「嘘つき。本当はうすうす気づいてたくせに……」

横目で星を見るハクリ。

それにつられて、シャインも星を見る。ロープ越しにでも彼が星を睨んでいる事は容易に理解出来た。

「星さん、それが本当なら酷いですよ。」

そう言い、ソウマも星を見る。

「でも、まあ船使わなくても、海の移動手段はある訳だし、良いじゃない?」

そして、星は服の袖から、一つのボールを出しそれを投げる。
ボールの中からは、ホエルオーが海に浮かぶ。

「ほーれ、皆の集。これで、海を渡れるよ。……あれ、
みんななんか視線が痛いんだけど?」

星の背中に刺さる4人の視線。

そして、

「先に言えよ！！！！！！！！！！」

「先に言え！！！！」

その後、星が彼らの鉄拳制裁を受けたのは言うまでもない。

鼻にティッシュを詰め、ホエルオーに指示を出す星。

しかし、その手にはソウマのリザードが入ったボールが握られている。

その後ろに、シャイン達が乗っている。

「星さん。どうしたんですか？急に僕のリザードなんて見て？」

星の横に座り直し問うソウマ。

「ん？いやー、気になってたる事が一つ有ってね。もしかしたら、ちと重要な事かもしれないし。移動中にでも、調べておきたくてね。」

照りつける太陽は清々しく、まるでこれから起きる事を予感させま
いとす天の悪意にも感じられた。

しかし、今の彼らにはそれを予知する術は無かった・・・

巨大なポットの中。

中には緑色の培養液。

その中に彼は居た。未だ意識は無く、自我と呼べるものは何もなかった。

うす暗い研究室には何本も同じポットが存在していたが、全て中身は違った。

一本のポットの中身は人間。残り10本のポットの中身は種族の事なるポケモン達

そんな、人の入ったポットの前にあるキーボードを叩く科学者たち。学者に声をかける、度々姿を見せる少女。

「みなさん、作業はどうですか？」

「これは、色欲様^{チャーム}。幸い『彼』が新鮮だったため、想いの作業は順調です。この分ですと、一週間も有れば『彼』らは目を覚ましますよ。それと、テンガン山内部で氷漬けになっていた人ですが、彼は

明日明後日中には目を覚まします。」

そう、報告する学者。

それを聞き、色欲チャームと呼ばれた少女は、ポットに目を向ける。

「そうですね。それは朗報です。これで、『セブンペナルティセブンペナルティ』の七つの罪レイジ』が揃います。そう、最後の罪『憤怒』の空位が。」

「はい。これも、アカギやサカキ。そして、フォンスが我々の口車に乗ってデータを取らせてくれたためです。」

「ええ。ですが、もう失敗は許されませんよ。」

蠢く闇は果てしなく。

今も光を食わんと蠢いていた……

第十七話 「不安の種」 (前書き)

大変長らくお待たせしました。

ようやく更新しました。本当に申し訳ありません。特に現在コロナ中のプラネット先生には多大なご迷惑をおかけしたことを心よりお詫びします

第十七話 「不安の種」

星のホエルオーの背中に乗り、ようやくついたカイナシティの郊外の浜辺。

数人の海水浴目当ての観光客が居たが、対して問題は無かった。

そして、ホエルオーの背中から浜辺に下りる面々。

しばらく体を動かせなかったハクリは、背伸びをして体をほぐす。

ソウマのリザードの入ったボールを持った星は、ホエルオーを早々とボールに戻し、再びソウマのリザードをポケギアでチェックし始める。

「で、星よ。これから何処へ向かう？まさか、闇雲に敵を探す、などとは言つまいな？」

星の背中に向けて言い放つシャインの言葉。

それに、答えるように星は振り向かず答える。

「ん？ああ、ひとまずの目的地は決まってるから、とりあえずそこに向かうつもり。まあ、とりあえずはここを離れましょ。流石に人目に着きすぎたわ。」

そして、回りを見る面々。

そこには、何人も客の目を奪っていた彼らがいる。

歩く事数十分足らず。

人目を避け、町の郊外を歩き、110番道路に来た。

ここでようやく星に問いかけるソウマ

話題は無論、自分のリザードの事だった

「あの、星さん。そろそろ、僕のリザードの事教えてください。リザードの何が有ったんですか？」

ソウマの問いを聞き、ようやくポケギアを仕舞い、リザードをソウマに返す星

「ほんじゃ、その事を話すついでに今後の事も話しますか。．．．その辺で一休みしながらさ。」

そう言って、木陰を指差す星。

適当な食事済ませ、一息入れる面々。

「さて、ほんじゃ今後の事を先に話すわ。．．．ひとまず俺らが向かう先は通称・ハイテクシティと呼ばれてる町『ラルース』に向かう。」

「向かう理由は？」

星の言葉に質問するシャイン

「ほいほい。もちろん理由はありますよ。理由1、今追っている敵が移動手段に飛行を使ってるから。ラルースは世界中の人工衛星のデータを管理している世界公共機関の一つだから、この世界中のどここの空をどう言ったルートで飛んだかがすぐに分かる。つまり、何が言いたいか分かる？」

シャインを指差す星
それを鼻で笑い返す

「愚問だな。つまり、敵の飛行ルートを見て、拠点の位置を絞り込む、違うか？」

「はい、御名答。……ラルースを向かう理由は今、シャインの旦那が言った通り。あと、19年前からデオキシスがラルースに協力して宇宙開発を手伝ってるから、デオキシスの力も借りられれば借りる予定。んで、ラルースに向かうまでの間、シャインの旦那が2人を鍛える。良い感じでしょ？」

星の言葉を聞き、ソウマとハクリの拳の力が入る。
それを横目で見るシャインとルカリオ。

「んで、次はソウマのリザードの話。……単刀直入に言うわ。ソウマ、しばらくリザードをバトルに出すな。つか、今のリザードにバトルは無理。」

「何ですか？」

リザードのボールを取り出し星に言うソウマ。

「んじゃ、リザード出してみ？」

その言葉に、従いソウマはリザードを外に出す。

進化して、バトル以外で初めて外に出すリザード。

ヒトカゲの時からの特徴的だった青白い尻尾の炎は健在で、体の色もどこか黒色がかっている。

しかし、何か変な様子が見て取れた。

何か怯えているようにな、何か違和感を感じているようにな、

「この、リザードは一種の精神病にかかっている。病名は『未成熟精神疾患』。通称『思春期病』。急激にポケモンの経験値がたまり、急激な進化を遂げたポケモンがかかる精神病の一種だ。まるで思春期の子供みたい、体の変化に精神がついて来れなくなるみたいだから、そういった呼び名がついた。」

「それは、すぐに治るのか？流石にこのままと言うのは無いだろう？」

星に問うシャイン。星もそれに答える

「時間はかかるが、治るよ。メンタル的な問題だからね。」

そんな、リザードを抱きかかえるソウマ。

「大丈夫だよ、リザード。大丈夫だから。」

その殺気にスピアーの群衆も怯え、全匹踵を返すように消えて行った……

「ふう〜。相変わらず結構なお手前で。」

消えて行ったスピアー達の方を見て、星がシャインにそう告げる。

「造作もない事だ。少し殺気で脅しただけだ。……それより、飛び出して来た子供はどうした？」

そう言い、後ろを向き、スピアーに追われていた少年に視線を向ける。

少年は、獣道を通っ切ってきたのだろう、頭や服には蜘蛛の巣や小枝、草などが仕切りなしについていた。

「いや〜、危ないところをありがとうございます。ポケモンを追って道を外れたら、スピアーの巣に入り込んでしまった。いや〜ほんと危ないところでしたよ〜。」

どこか拍子抜けする声のトーンで少年は頭をさすりながらシャイン達にお礼を言う。

それを聞き、ハクリは呆れた声で返す。

「少しは気をつけないと、本当に大けがするよ? ……まあ、怪我が無くて良かった。私、ハクリ。貴方は？」

ハクリから名乗り、少年の名を聞いた

「あーごめんなさい。自己紹介がまだだったね。僕の名前はイータ。去年トレーナーになったばかりなんだけど、ほら。僕今みたいにドジ踏む事が多くて、リーグ戦に間に合わなくてさ……」

少し、落ち込んだ様子で話すイータと名乗る少年。

しかし、再び元の声のトーンに戻り話を切り返す

「ところで、ハクリさんたちはどこに向かうんですか？」

イータの問いに代わりに答える星。

「ひとまず、キンセツに向かう予定だけど？それがどうしたの？」

それを聞き、イータは胸の前で手を合わせ笑顔になる。

「わー！丁度いいや！！途中まで僕も同行させてくれませんか？……また、スピアーの群れに追われるのも嫌だし……」

イータの提案を快く受けたのはハクリとソウマだった。

「良いよ？旅は多い方がいいし！！」

「うん。僕たち、トレーナーになったばかりで、あんまり他のトレーナーとの交流が無かったから嬉しいな！！」

しかし、シャインはその提案を反対した。

「良いのか？貴様たちの旅は、ただの旅ではないのだぞ？交流を深めるのもいいが、貴様たちには果たしたい使命が有るはずだ。何よ

り、これから貴様らは他人と交流する暇がないほどにトレーニングをしなくてはならないのだぞ？」

現実的なシャインの言葉に、今しなくてはならない事を思い出す2人。

そんな、2人に助け舟を出す星。

「まあまあ。旦那。どうせ同じ道に行く訳だ。何より、トレーニングをするならこの、少年にも付き合ってもらえばいいだろ？」

笑顔で、シャインに近づきシャインの横まで近づくと小声に切り替える

それこそ、シャインにしか聞こえないほどの声で・・・

(お宅も気づいてるだろ？あの小僧、普通じゃない事ぐらい)

(だからこそ、2人とは話しておくべきだと思うが？)

(・・・俺の勘だが。追っている敵と何かしら繋がってる。尻尾を出したら捕まえる。どうだ？)

(・・・分かった。)

そして再び笑顔になる星。

そしてハクリ達の方に向き、近づくと

「シャインの旦那の説得に成功！ほんじゃ、行きますか。しばらくよろしくな、イータ少年！！」

「はい！よろしくお願ひします。」

そして、彼らは歩き出した。

一番後ろを歩くシャイン

一瞬振り向き、イータが出てきた場所に目を向ける。

スピアーの巣がある森の奥。

しかし、そこには数匹のスピアー以外は全て、生きてはいなかった。

・・・

羽を？がれ、彼らのすみかだった場所は・・・無残な墓標と化していた・・・

第十七話 「不安の種」 (後書き)

ええ。すげー時間をかけたのに、全然進んでいないという、ふざけた展開です。

申し訳ありません。言い訳も弁解もいたしません

第十八話 「夢への想い／怠惰と傲慢と暴食（前書き）」

遅れながら、第十八話更新です

第十八話 「夢への想い／怠惰と傲慢と暴食」

「よし！！エアームド！！ラスターカノン！！！」

ソウマの声が夜空の森に響く。

日中、シャインとの訓練で、彼のルカリオが『ラスターカノン』を主に使っていたため、もしかしたらと思いい、自主連を兼ねて実践してみようとしていた。

しかし、結果は

エアームドの周りにエネルギー体は収束はするものの、まだ技と叫べる物までには達していなかった。

「ああ、ダメだったか……。やっぱり今日見てすぐには出来ないか。」

肩を落とし、落ち込むソウマ。

そんなソウマを座りながら見るシャインとルカリオ。

（……。筋はハクリ以上か……。流石はクロノの息子と言う訳か。しかし、それだけではあるまい）

何度かソウマの戦いを見て、彼の中にあるバトルセンスに気づくシャイン。

そんな、想いをルカリオ・デルタに告げる

（お前から見て、あのソウマという少年はどう見える？）

(・・・あのハクリっ言う女の子よりはバトルの才能は高いと思う。でもそれだけじゃない気がする)

(と、言うこと?)

(確証は無いけど、もしかしたら彼は昔バトルをしていたんじゃないか?あの星とか言う人の話では、彼はコンテスト一筋って話だけど、あのエアームドは明らかに戦い慣れしてるし、何より彼の指示が的確すぎる)

デルタの的確は的を射ていた。

猪突猛進な戦い方のハクリとはま逆な戦い方のソウマ。

コンテストを専攻していた人間・それも初めて旅に出た子供が、コンテストとバトルを両立できるはずがない。

そんな彼を見て、2人はソウマを『昔、バトルをしていた』と睨んだ。

ソウマの横で同じく訓練をするハクリ。

コドラを出し、ソウマ同様に『ラスターカノン』の訓練をしていたが・・・

「コドラ!今度こそ成功させるわよ!!」『ラスターカノン』!!」

ハクリの指示も虚しく、コドラは微弱なエネルギー体を集めることしかできなかった。

ソウマのエアームドのそれとはかなりかけ離れ、技の完成には程遠かった。

「むう……。何が悪いんだろ？」

技の出来をみて悩むハクリ。

（……変わって、ハクリは……。バトルセンスは無い訳では無いんだがな。）

ソウマとの潜在能力の違いを見比べるシャインとデルタ。

（彼女は、バトルを始めたばかりって言った風が見えるな。力技で押そうとしている素人独特の癖が抜け切れてない。だから、新しい技の習得に時間がかかる。）

シャインに念でそう告げるデルタ。

（さて、どうしたものかな……。）

訓練を初めて、分かった難題に頭を抱えるシャイン。

戦闘能力が高いソウマ。

彼に攻撃を担当すれば解決する話なのだが、ハクリとコンビを組んだ時は彼がサポートに徹してしまっている。

戦闘に不向きなハクリ。

いや、潜在能力が低い訳ではない。しかし、ソウマと比べるといかんせん見劣りしてしまう。

そうになると、彼女にサポートに回ってもらう方が戦略的に有利になるが……。

しかし、それを彼らが良しとするかどうか。

日中のトレーニングを見ても、明らかにソウマがサポート・ハクリがアタツカーを務めていた。

それが悪いという訳ではない。しかし、今以上の攻撃力を得るには、彼らの立ち位置を変える方が明らかに早い。なにしろ彼らに与えられた時間は左程多くは無いのだから……

「ほいほい。皆の集、晩飯作ったぞ〜。」

そう言う星。赤々と燃える薪の上に乗せられた鍋。鍋の中から広がる良い香りが彼らの鼻孔を刺激する。

「早く食べましょう。僕はもうお腹ぺこぺこで。」

腹部に手をやり、空腹を訴えるイータ。

夕食を終え、一息入れる一同。

「ところで、2人は何か夢は有るの?」

ソウマとハクリにそう問うイータ。

マグカップの中身を口に入れようとしたハクリは、それを止め、イータの問いに答える

「ん〜……。今はやっぱり、お父さんみたいにジムリーダーになることかな?でも……」

「でも?」

口ごもるハクリ。

「言っても笑わないですよ？……教師も良いかなって思
つてる。」

思わず嘔き出す星。

「ああ！！笑ったな！！」

器官に入ったのか、むせ込む星。
そんな星を見て問うシャイン。

「何がそんなに可笑しい？」

「ゴホゴホ……いやー譲ちゃんがあまりにもおかしな事を
言うからさ。……学年で万年ワースト10入りしている子が、教
師とか言うからさ。ああ可笑しい。」

よほど可笑しいのか笑い転げる星。

「むう~~~~~!!」

珈琲を飲みながら星を睨みつけるハクリ。

「でも、ハクリは人に物を教えるの上手だね。クラスの中でも先
生より教えるの上手な時も有るじゃん？」

ハクリのフォローに入るソウマ。

「へ〜そうなんだ。そう言うソウマ君は？何か夢は有るの？」

不意にイータに問われ悩むソウマ。

「そうだなあ〜……………コンテスト全国制覇、と言いたいけど、それはポケモン達を知る方法って意味合いが強いしなあ〜……………差し詰め学者かな？」

「学者？」

「うん。オオキド博士とかナナカマド博士みたいにポケモン学者になりたいかな。今僕の中にある夢はこれかな？そう言うイータ君は？」

質問を返されるイータ。

思っても居ない事だったのか驚く。

「夢か……………今は……………夢を持つ事が夢、かな？」

「何それ？」

そう返すハクリ

星空を見上げ、話すイータ

「今の僕は、ただ漠然と生きているだけ。旅だつて建前だし、夢なんて持てるような環境で育つてなかった……………だから今の僕の夢は、夢を持つ事。」

「なんだか知らないけど、私はイータのその夢を応援するよ。頑張

ってね。」

「ありがとう。」

そう言い、ハクリを見るイータ。

夜も更け、子供たちが寝静まった頃。

少し離れた場所で、ポケギアを弄る星。

「おい、少し良いか。」

星の後ろに立つシャイン。

「……イータの事か？」

「ああ。何か分かったか？」

両手を肩ほどまで上げ、お手上げのポーズをとる星。

「今、知り合いにあの小僧の事を調べてもらってる。まあ、分かっ

た事も有ったけどな。」

「何だそれは？」

「……戸籍上、イータと呼ばれる人間は居ないって事がさ。」

少し困惑するシャイン

「OK、OK。分かるように説明するわ。つまり、あいつは、世間一般では、死んだ事になってるってこと。」

「なるほど。……そんな奴が何で生きているのか、と云うところか。」

「そう言う事。で、今この坊主の生前の素性を、知り合いに洗いざらい調べてもらってること。」

ポケギアを畳み懐にしまう星。

ただ、歩く音だけが長い廊下に響く。

歩きながら、本を読む青年。

そして、一つの扉を潜り、部屋の中へ

「ん？おや、貴方がこんなところに居るとは、明日は槍でも降るんでしょうか？」

思わぬ先客がいた事を驚く青年。

先客は、椅子に座り、コンソールの上に足を乗せ、リラックスした様子で、今入ってきた青年に言葉を返す。

「ん〜。まあ、一応様子見よ。ああ〜めんどくせえ……………」

そして、目の前のモニターに映し出されている画像を見る。

「まったく。名は体を表す、と言いますが、貴方の『怠惰』には呆れますね。」

「あつそ。俺は、お前ほど『強欲』にはならなくてね。あ、そうそう。例の忍者親父、うち等の先兵として使ってみたいだから、そこんところよろしく。」

生あくびをする先客。

「ほお、もう起きたのですか。」

青年は下がったメガネを上げ、不敵な笑みを浮かべる。

第十九話 「彼のための翼」

彼らと旅を初めて幾日が過ぎ去ったのか？

そんな物を数える旅人は、まさに初期の旅人くらしいなものだろう。
霞のようにおぼろげだが、記憶、心には確かに刻まれた足跡は、確かに刻まれていく。

しかし、そんな彼らには、ゆっくり心のアルバムに旅の写真を刻む時間は無かった。

「エアームド！『ラスターカノン』！！」

対峙するシャインの指示するルカリオに向けて、ソウマのエアームドがラスターカノンを放つ。

「ほう……」

驚きはしないが、声を漏らすシャイン。

技の習得、ポケモンへの的確な指示。何よりこんな短時間で。戦い成れている訳でもない子供が、ポケモンに新しい技を覚えさせた事に対して、声を漏らさない者の方が少ない。

そんな、エアームドのラスターカノンを紙一重で交わすルカリオ。避け無事に着地をする。が、実際危ないところだったのはシャインと本人の秘密だった。

「すごい！ソウマ、もう『ラスターカノン』を習得したの？」

「う、うん。僕も出来たんだし、ハクリもできるよ。」

ソウマの横で本人以上に喜ぶハクリ。
しかし、本人であるソウマはあまり嬉しそうではなかった。

（当面のソウマのエアームドの攻撃力アップはこれで良い。あとは例のリザードか……。少し荒療治で行くか。）

そして、シャインはソウマの真後ろに立ち、怯えたような、警戒しているようなリザードを見る。

あれから、何度かバトル的なものを何度か行った。

個としての強さは申し分ない。が、やはりメンタル的部分が著しく弱い。

これが意味するもの。すなわち、圧倒的なピンチの時、踏ん張る力が出ない。そう、今後戦うであろう、強敵との戦いの際、実力以上の力が出せなくては確実に負ける。

最悪の場合。『死』が訪れかねない。それだけはなんとしても阻止したい。

それが、シャインの思いだった。

幸い、星の話しでは、すでにリザードンへの進化に『肉体』は耐えられるレベルになっているらしい。

かなり厳しい賭けになるかもしれない、敵は待つてはくれない。ならば、

「……ソウマ。リザードだけを連れて私と来い。ルカリオは、ハクリとこのまま特訓を続ける。」

「あ、はい。」

そう言い、ソウマはハクリに残りのボールとエアームドを預け、リ

ザードを連れてシャインの方へ行く。

「え〜。ソウマだけ？私はあ〜？」

「ラスターカノンを習得し、ワニノコをアリゲイツに進化させてからだ。」

「ぶう〜。」

頬を膨らませ、拗ねるハクリ。
そして、渋々特訓を再開する。

シャインさんと歩いてどれほどになるだろう。

随分と歩いた気がした。

リザードも大分疲れてきた様子だ。少し、休ませてもらおう。

「あの、シャインさん。少し休みましょう。リザードが疲れて・・・」

「着いたぞ。」

僕の言葉が言い終わる前に、シャインさんが口を開いた。

目の前に広がる景色は、断崖絶壁。

落ちたら・・・まず助からない。

僕は思わず、固唾をのんだ。足元のリザードも、すごく怖がってい

意味が理解できなかつた。
今、何をされて、自分が宙に浮いている事さえ理解するのに時間がかかつた。

悲鳴にならない声が、崖に、森に響く。

崖に近づき、ソウマが落ちた場所を覗くりザード。
目を丸く『助けなきゃ』と言う意思は見えた。しかし、足が震えている。心が『深い崖』への恐怖で満たされていた。

「どうした？お前にご主人が落ちたんだぞ？助けなくていいのか？」

そう、言い放つシャイン。

そんな、シャインを睨むリザード。そして、飛びかかり噛みつきこうとするが、それは軽く交わされる。

「私に襲いかかる前に、ソウマを助けに行ったらどうだ？・・・
本当にこのままいけばソウマは死ぬぞ？」

シャインの言葉で再び崖へ視線を向けるが、崖に目をやると足がすくんでいた。震えていた。

「急に進化して、体の変化に心が付いていけなくなったそうだな。だが、そんなお前をソウマはどうした？ 怯えたか？ お前を拒んだか？ いいや。何も変わらなかった。違うか？」

シャインの言葉を聞き、我に帰るリザード。

そして、初めてソウマと出会った事を思い出した。

空に憧れていた自分を、空へ上げてくれた。

なら、あの時の恩返しを今！！

崖に向けて走るリザード。

そのままの早さで、飛び降り、さらにその壁を駆け降りた。

尖った岩が皮膚を傷つけるが、そんな事どうでもよかった。今は早く駆け、彼に。ソウマを助ける事の方が大事だった。

見えた。しかし、見えたただだった。まだ届かない。速さが足りない。

羽が欲しい。あの時、願った自由に空を舞える翼が。羽が。

遠のいていく意識の中、ソウマは初めて相馬灯と言うものを見た。

たった、10年程度の人生だが、確かに見た。

『ああ、僕死ぬのか』

そう、思えた。

しかし、そんな中。視界にリザードが見えた。

居るはずが無い。こんなどこに来たら危ないよ。そう思い手で払いのけようとするが、そこでソウマの瞼は、閉じてしまった。

妙な浮遊感の中にソウマはいた。

「・・・天・・・国？」

思わずそう、口にする。

無理も無かった。空が近かった。手を伸ばせば届きそうなほどに。

しかし、背中に感じる温かさ。耳に聞こえる羽の羽ばたく音が、天国では無い事をすぐに教えてくれた。

上半身を起こし、視界を変える。

最初に見たのは、蒼い炎の灯った黒い尻尾。そして空。すぐに理解出来た。

彼が自分を助けてくれた事を

「リザード!!! ううん、今の君はリザードン!!!」

さらに視界を変え、助けてくれた彼の顔を見る。

先刻まで、臆病なりザードだったソウマのパートナーのポケモン。

「ありがとう。」

お礼を言う、ソウマにリザードンは、小さく鳴いた。
まるで、『ありがとう』と言っているように……

上空を飛びリザードンを、木の枝の上から見るイータ。

「へえ。大分荒療治だけど、あれで進化出来るもんなんだ。」

そっつい、リンゴを口に運ぶ。

「ま。僕には関係ないか。」

それだけ言い、彼は木の枝から下りた。

第二十話 「漆黒に染まる名刀達・響く声」

迷子の迷子の英雄さん

心の迷宮で一人彷徨い・全てを忘れてく

迷子の迷子の英雄さん

友も仲間も敵も味方も忘れてく

迷子の迷子の英雄さん

貴方は何者なんですか？

俺は誰だ？俺はなんだ？俺は………武人！

敵を絶ち、目的の為には仲間もその刃にかける事を厭わない、愚直なまでの武人。

左の腰には『人』を絶つ二振りの太刀を携え。

右の腰には『魔獣』を絶つ『英雄が携えた10本の太刀』を携え。

白衣を着た学者が何人もいる、うす暗い研究室。

彼らの目の前には、11個の緑の培養液が入った巨大なポット。その中には10種類のポケモンが。最後の一つには、人間が。

「……計算上では、もうそろそろ目を覚ます予定だが。いかにせん上手く行かないな。」

「ああ。流石に色欲様達のケースが全て使える訳ではないからな。しかも、記……。ん？」

一人の研究員が人間の入るポットに目を向ける。

そして、ポットに亀裂が走り、砕け散る。

「!!!!!!どうした!?何が起きた!?!」

うろたえる研究員。

「騒ぐな!見つとも無い!貴様らはそれでも、栄光ある我らが組織の一員か!?!」

ざわめく研究室に響く男の一括。培養液の水たまりに立つ男の声。

男の体から滴る緑色の液。つまり、この男がポットから出てきた本人。

男の名は

「お、おお!憤怒様!!!ようやくお眼ざめに。」

男の名は憤怒^{レイジ}。

怒りのを司る存在。それがこの男の生きる理由。

「世話をかけた。誰か、俺の着物を持て。それと面と太刀もだ。早くしろ。」

「は、はい。只今。」

そう言われ、一人の研究員が男の着物と目元を隠す面。そして、武士を象徴する二振りの太刀を持つ。

レイジが纏う着物。それはまるで、袴を思わせるような服だった。装飾の帯の脇差と太刀を刺し、最後に面を被る。

「やはり、この恰好が一番しっくりくるな。」

一息入れ、深く息を吐く。

そして、近くの研究員に解いた。

「おい。この『英雄が使った10本の太刀』はもう、使えるのか？」

「はい。データ上では可能ですが、未だ目覚める兆しはありません。」

「……そうか。」

そう言い、レイジはポットの前まで歩み寄る。そして、腰にさした太刀に手を、持って行き。

一閃する。

今何が起きたか分からない研究員達。

気が付いたら、レイジが腰にさしていたはずの太刀を抜刀していた。瞬きをした者は、まさしく『瞬く間』に事が起きたようにしか見えなかっただろう。

さらに驚くべきは、残りのポット全てが真っ二つに切られていた。無論中のポケモン達は無傷である。

「レ、レイジ様！何を！？」

我に返った研究員がそう叫ぶが、さらに驚く事が起きた。

今まで、目覚める兆しの無かったポケモン達が全て目覚めたのだった。

バシャーモ ガブリアス ムクホーク ウィンディ ポーマンダ
ガラガラ ルカリオ ムウマージ ニドキング マニョーラ

その10体全てがレイジのもとに集った。

「うむ。理論上で動けば、十分だ。あとは、こちらから起こせばいいだけだ。」

そして、太刀を鞘に納めるレイジ。

一部始終をモニター越しに見てる色欲チャームと一人の老人

「とうとう、私たちの長が目覚めました。ようやく、計画が本格的に動きます」

小さく頷く老人

「うむ。……フォンスの阿呆のせいで少々遅れたが、逆にさらなるデータ収集に役立つた。さらに、サカキ、アカギの2人もまさか、我々の実験材料になつていたとは思わなかつただろうな……。奴らのおかげで、必要なデータ、資材。そして、最強のトレーナーとポケモンが我手中に収まつた。」

掌をモニターに伸ばす老人。

「これで最後のピース。『破壊神』の卵をこの手にすれば！」

椅子から立ち上がる老人。

伸ばした掌を返し、開いた手が何も無い空間を力強く握りしめる。

かつて創生神アルセウスが居た空間。

その、奥に有る謎の卵。

『……………聞こえる。世界の、人の。生き物の悲鳴が……………』

未だその姿の無い、卵の中の者の声。

その声は、『世界』の人々には届かず、この空間にただ、小さく響くだけだった……………

第二十一話 「ね回し」

このメンバーで旅をして数日。

ひとまずの、目的地・キンセツシティが文字通り目と鼻の先に有った。

「ん〜！・・・ようやく点いたキンセツシティ。」

背伸びをして、眼前に見えるキンセツシティを見るハクリ。

「・・・また、ここに来たのか・・・。」

そうつぶやくソウマ。

ここに来ると、嫌の事を思い出す。

それが、ソウマとハクリの内心だ。

ここに来なければ、クロノは死ななかつたかもしれない。

そんな、事が頭の中をよぎる。

「とりあえず、ポケモンセンターまで行きましょう。僕お腹減っちゃった。」

腹部をさすり、空腹を訴えるイーダ。

何食わぬ顔をして、顎髭をさする星。

しかし、実際少し計算外な所があった。

そんな星を見て、シャインが耳打ちする

「……このまま、逃がして良いのか？」

「……ちよつちまずいかもね……。しゃー無いか……」

一歩、イータ達に近づく星。

一呼吸置いて、話を切り出す。

「……ちよつちイータ君。良いかな？」

「?どうしました、星さん」

振り向き、小首をかしげるイータ。

袖から、ポケギアを取り出し、戸籍票のデータを画面に映し、それをイータに見せる。

「お宅。何で戸籍票に乗ってないの？」

顔つきが変わる星。

まるで、敵を見るような目でイータを見る。

答えに困る様子をするイータ。

今は至って普通の子供のように見えた。

「おや？イータじゃないですか。キンセツに戻ってきたんですね。」

そんな、イータに助け船を出したのは、見ず知らずの人間だった。

小脇に分厚い本を、抱え横には数人の黒服のボディガードを連れた身なりのしつかりした青年。

その人物は星は愚か、ハクリやソウマですら知っていた。

「ああ！！ポケモンバツカーの『グリーンデント』のグリーンズさん！！」

指をさし、青年の名を叫ぶハクリ。

ポケモンバツカー

ポケモンで行いスポーツの一つである。似たようなもので、カントー、ジョウトではポケスロンと呼ばれるスポーツが盛んに行われている。

今や、世界ではポケモンはバトルやコンテスト以外に様々な形、職種が存在する。

ポケモンバツカーは、そんなポケモンスポーツの中で今、もっとも人気の高いスポーツの一角である。

今、ハクリ達の前に居るグリーズは、ホウエンを代表するポケモンバツカーのチーム『グリーンデント』を率いる若き天才と呼ばれているほど、凄腕のトレーナーとして世界でも注目を集めている。

「ははは……。知っていくれて光栄だね。ところで、どうしたん

「だいいータ？」

「あ。ねえ、グリーズ。僕の戸籍が消えてるんだけど、どうして？」
グリーズに聞くイータ。

それを聞き、何か知っている様子のグリーズ。

「ああ。その事ですか。……ご説明しますので、ひとまずキンセツに行きませんか？立ち話もなんですし。」

「……はいよ。」

そう言い、ポケギアをしまう星。

綺麗な喫茶店で話を聞くことになった一向。
有名人特権なのか、喫茶店は貸し切り状態にもらった。

「さて、では戸籍の件ですが。……星さんはここ最近に起きたキンセツの事件はご存知ですか？」

「さあ？」

珈琲を口に運び、一息

「つい一週間前。キンセツの戸籍票を管理するデータベースが何者かに破壊された事件がありました。破壊だけならば、良いのですが、今度はマザーベースであるラルスにもハッキングを行ったらしく、キンセツの住人の戸籍のデータが全て消えしまったのです。」

「へえ……。」

「……疑っていますね。良いでしょう。では、マスター。」

店の店主を呼ぶグリーズ。

手を拭きながら、厨房から出てくる店の店主。

「はい。どうしました？」

「戸籍のこと、って言えば分かる？」

「ああ。あの事件ですね。いやー大変でしたよ。施設の復旧に数日そこから、データの再入力。おかげで、しばらく身分証明書が無かったから、町の外に出れませんでしたよ。でも、グリーズさんが手を貸してくれたおかげで、予定より早く復旧しましたねえ。ほんと感謝しますよ。」

店主が嘘をついているとは思えなかった。自分たちが居ない時に、店主を買収したとは考えにくい。

何より、戸籍を管理している施設が今でも、町の人でこった返していたのが、何よりの証拠だった。

(チツ……。先手を打たれたか。……。と、言いたいが、今は泳がせとくか)

ようやく、敵を見る目を止めた星。

「いやーそんな事件がねえ。 イータ君すまんかった!」

手を合わせ謝る星。

「いえ、良いですよ。誰だってあんな状況だったら疑いますし。」

特に咎める事をしないイータ。

「ねえ? イータ君とグリーズさんってどういう関係なの?」

グリーズの横に座るイータに聞くハクリ。

「あ……。言いくいなあ……。」

言いくそうに、目を泳がせるイータ。

そして、再びグリーズが助け舟を出す

「……。イータは、実の両親に虐待を受け、私の父が養子として保護した子です。今では、私の可愛い弟ですよ。」

そう言い、イータの頭を撫でるグリーズ。

聞いちゃ悪い事を聞いたと、言う顔をするハクリ。

そんなハクリを見て、弁解するイータ

「気にしないでハクリちゃん。過去は辛いけど、重要なのは今だしね。」

何も無かったかのように笑うイータ。

そんな時、グリーズの近づくボディガード

「グリーズさん。そろそろお時間です。」

「ん？そうか。……では、みなさん、私バツカーの試合の為、シンオウに行かねばならないので、これで失礼します。……イータ、お前は点取る？点いてくるかい？」

「ん……。良いの？」

「ああ。第一人くらい問題無いさ。」

そうして、2人はハクリ達と別れた。

イータ達と別れた後

とりあえず、今日はキンセツに止まることにした。

人が寝静まった夜のポケモンセンター裏手に星は居た。

「・・・ああ。頼む、ここ一週間のうちにキンセツにいなかったキンセツ出身の人間を全員調べてくれ。・・・難しいのは当たり前だろ？んじゃ頼むぞ？」

そして、電話の主との連絡を絶つ星。

「・・・ほい。お待たせ。」

星の横で一部始終を見ていたシャイン。

「あれで良かったのか？・・・イータとか言う奴を逃がして。」

「問題なしよ。・・・ホレ。」

そう言い、ポケギアの画面を見せる星。

画面には赤いマーカーが点滅しながら、地図を移動していく。

「発信機付けといたから。」

自家用の飛行機に乗るイータとグリーズ。

「……危なかったですねイータ。私に感謝してくださいよ。」

「うん。ありがとう。しかし、良く言えたねあんな、即興の嘘。」

足をブラつかせ、グリーズに問うイータ。

「あながち間違っていないよ。」

本のページをめくり、答えるグリーズ

「……ところで、僕今回、いろいろ指示してから、彼らと接触したよね？戸籍の事とか。何で、こんなことになったの？」

「ええ。スタッフの一人が、凡ミスをしましてね。それですよ。」

「ふん……。……スタッフ一人消えても問題ないよね？」

「ええ。問題無いですよ。……ただ、食べるなら誰も居ない時にしてくださいね？」

顔色一つ変えずに、話す2人。

第二十二話 「船上の憂鬱」

イータ達とキンセツで別れ、ソウマ達は目的地のハイテクシティ・ラルース行きの船の上にいた。

幸い、今回は船に乗れた事で、思いの他速くラルースへ到着しそうである。

空は蒼く、漂う雲は自由気ままに。

そんな、船上の屋外で、ハクリとシャイン、ルカリオは変わらず特訓と繰り返し返していた。

ソウマの方は、リザードをリザードンに進化したため、ひとまずの特訓は終えたと言える。

ゆえにハクリとは別メニューの特訓を行い、星が相手をしていた。

そんなソウマを気にしているハクリ。

未だにエアームドは『ラスターカノン』を習得できず。

そして、パートナーとなったワニノコは未だにアリゲイツへ進化する様子もない。

ソウマのヒトカゲはリザードンまで進化したというのに・・・

「よそ見をしているのか？指示が遅れているぞ。」

「あっ!?!?」

横で特訓するソウマに気を取られ、エアームドに対する指示が遅れ、ルカリオの強力な蹴りが入り、エアームドは地面に落ちる。

エアームドに駆け寄り、心配するハクリ。

「……………どうした？特訓に気が入っていないぞ？」

近づき、ハクリに言うシャイン。

「……………すいません。」

そう小さく答えるハクリ。

「……………今日はもう良い。少し休め。」

シャインはそう言いルカリオと一緒に甲板を離れる。

「うう〜……………」

うめくような声を出しエアームドをボールに戻す。

そんな、ハクリを横目で見るソウマ。

「ほいほい、少年。よそ見は厳禁よ？」

そう言い、ムクホークに攻撃の指示を出す星。
しかし、ソウマの指示はそんな不意のタイミングでも十分対応していた。

特訓中のリザードンは、攻撃には転じられなかったが、回避する分には十分間に合った。

「ほ……流石だね。んじゃ、今日はこれくらいにしますか。」

星はムクホークをボールに戻し、シャイン達の消えた方に有るいて行く。

人気のない船内の一角にシャイン達はいた。

「ほいほい。お待ちせ。」

「目的地まではあとどれくらい到着する？」

「ん？後2日位だね。まあ、それまでに譲ちゃんの方はボーダーラインまで届きそう？」

「・・・・・・・・」

何も答えないシャイン。

実際、かなり厳しい問題だった。

ソウマは確実にその実力を伸ばしつつあった。

しかし、ハクリの方は違った。

事実、シャインもハクリの実力の低さに『クロノの娘』である事を疑いかけるほどだった。

が、それは親がクロノであるから比べてしまったためであり、同年代の子の中では上位の実力を持っている。学力はともかく・・・。

「さて、どうしたものか・・・。」

悩むシャインに、星が口をはさむ。

「・・・・・・・・お宅には本当の事話しとくかね。」

「・・・・・・・・なんだ？」

「・・・・・・・・お宅もハクリ譲ちゃんに違和感感じてたんじゃない？『クロノとアカネに似てるけどちょっと違う感じ』、『ソウマと似てるけど確実に違う感じ』をさ。」

いつもとは違う星の声のトーン。

冗談では無い声のトーン。

第二十三話 「ラルース上陸」

船上での2日と言う時間は限りなく短かった。

そして、ハクリもローブの者が定めるボーダーラインに達する事は出来ずにいた。

いや、ソウマとの自主トレも兼ねてようやく『ラスターカノン』をエアームドに覚えさせる事が出来た。

船着き場で、立ち往生する星達。

ハイテクシティ『ラルース』

このホウエン地方だけでなく、各地方の気象情報などを調べる人工衛星を統括するこの町は、今までの町とは全てが異なっていた。

彼らが、ここで立ち往生していたのはその『ハイテクさ』故に有った。

ラルースに入るには大きく分けて3つの方法がある。

1つ目は、ソウマ達が入った方法の『船』

2つ目は、『モノレール』『電車』によるもの。

最後は、『陸路』。つまり自らの足である。

これ以外の方法だと、問題が発生する。

その、問題が

『パスポート』の習得である。

ラルースが他の町と違う大きな理由の一つがこの『パスポート』である。

そう、ラルースに入るのはいわば『入国』と言っても過言ではない。

この『パスポート』は、ラルースに滞在する間は、常に必要になるもので、これ一つで買い物から、身分証明書と様々な機能が搭載されている。

しかし、それはパスポートをもらう側の『戸籍』があつて初めて発行される。

つまり、『こちらの世界』の住人ではないローブの者・シャインにはパスポートを取得する権利そのものが無い。

それが、星達がここで立ち往生している理由である。

「はてさて……どうしたもんかねえ……」

顎をさすり、考える星。

いかんせん根回しが足りない今回の星。

しかし、無理にパスポートを発行してもらつた必要はない。

無いとラルースでの生活ができないだけであるが、星が悩んでいるのはそこでは無かった。

「……はあ。しゃーない。二手に分かれるぞ。おいっちゃん達は通常通りにラルースに入国するから、おたくらはこっから見つからないように、あの大きなビルまで別行動で向かつてよ。」

船着き場からでも見えるラルースを象徴する全面ガラス張りのビルを指差す。

「んで、見つかつちゃいけないのが、アレね。」

そう言い星は自分の後ろを通る浮遊する四角い箱を指差す。

それは、ラルースのセキュリティシステムであり、パスポートを発

行する端末でもある。

自立思考システムが搭載されており、独自の判断で行動、パスポートの発行などを行うため、人員を咲かなくて済むが、今の星達にとっては少々厄介である。

仮に、別行動中のシャイン達が見つければ、パスポートの提示を要求される。

パスポートの無いシャイン達は提示が出来ないため、不法侵入の対象になり、ラルースから強制退去を命じられる。

それは、なんとしても避けたいが、シャイン達がそんなヘマをするとは星は初めから思ってた居ない。

「分かった。あの建物に、見つからないように行けばいいんだな。」

「そ．．．．あと、気をつけるよ？たぶん、今日ここで一戦あるかも．．．。」

「．．．．分かった。」

星の横を過ぎるシャイン達にそつと耳打ちする星。

それに答えつつシャインは人目につかない方へ歩いていく。

うす暗い廊下を、憤怒は歩いてきた。
そして、一つのドアを開け中に入る。

部屋の中には、数人がおり椅子に座っている。
その座っている人を見渡し、食事をしている少年に聞く

「暴食。色欲はどうした？」

暴食と呼ばれた少年は、丁度食事を終えたらしく、しゃぶっていた
骨を皿の上に置き前掛けを外しながら答える。

「確か、ラルースに行ったはずだよ？デオキシスの捕獲と気象観測
システムの破壊の任務のハズだったけど？」

「そうか……。少しまずいな。」

「どうしたの？」

「英雄の子供達と、異世界の住人が先ほどラルースに到着したとの
報告があった。子供達の相手は問題ないが、流石に異世界の住人も
相手となると色欲と言えど厳しいと思つてな。……仕方がない。」

そう言い、憤怒は踵を返すがごとく背を向け、部屋を出て行くとする。

「私も、ラルースへ向かう。お前たちは、当初の目的通りにイツシ
ユ地方の『真実』と『意志』。それと『三つの正義』『勝利の奇跡』
の検索を続けくれ。」

それを言つと憤怒^レは部屋を出て行く。

第二十四話 「魅了の奥の悪意」

宇宙。

人が未だ、その全てを知る事の敵わない世界。そして、人が済むには余りにも過酷な世界でもある。

しかし、彼は違った。

そんな宇宙を、デオキシスは自由にいられた。

この星を自由に出入り出来ただ一つの存在であり、彼にのみ与えられた特性だった……。

デオキシスも帰りを待つ少年。名をトオイと言う。プラスルとマイナンを連れて、お気に入りの植物園で待っていた。

このハイテクシティでも、ポケモンの研究をしている者や専門的な設備も有る。

様々なポケモン学者が居る中で、10人の名前を挙げてくれ、と言う質問をすれば彼の名も挙がるだろう。

それが、ロンド博士であり、トオイの父親でもある。

さらには、このラルースの市長でもある。

無論、学者ゆえに専門分野以外も携わっている。

その一つが、『人口衛星』と『宇宙探査』である。

世界の人工衛星の全てと言えば大げさであるが、それほどの規模でラルースは人工衛星を管理している。

宇宙探査は、 Rond博士の専門分野も関わっている。
この計画には、デオキシスの協力が必要である。

「博士。もうすぐデオキシスがラルースに到着します。」

「ああ。・・・しかし、彼には悪い事をしたな。」

そう言い、纏まられたデータに目を通しながら居ないデオキシスに謝る Rond博士。

衛星の無人探査機が突然機能停止し、計画に甚大な被害が及ぶところだった。

しかし、デオキシスの協力により、なんとかデータでも回収ができた。

情けない話であるが、人間はポケモンの研究にとらわれすぎた半面、星の外の事にはあまり関心が無かった。

ゆえに、ここ5〜10年ほどであろうか・・・。外の星に無人の衛星を向かわせ、調査をしたのは。

過去に、月面へ人類が着陸した、と言うデータは残っているが、そこからは大した発展は無かった。

宇宙への探究心より、ポケモンへの探究心が勝ったというべきなのだろうか？

そんな時だった。

研究室の扉が開く。ドアの方へ振り向く博士。しかし、ドアを開けたのは招かれざる客だった・・・。

デオキシスが、この星に来るのは一か月ぶりだった。
惑星で止まってしまった探査機のデータの回収に向かったからである。

全てが終わった後、デオキシスはここで宇宙探査の研究を手伝う事にした。

宇宙で自由に活動できる彼にとってこれほど適切な事は無い。

ようやくラルースを前にして、久方ぶりの友人が居た。
レックウザである。雲に隠れるようにして、彼を待っていた。

「久しいな、デオキシス。」

「ああ。一か月ぶりか？どうシタ？おマエが挨拶のタメに顔を出シ
たとは思エナいのだが。」

「……今から話す事は事実だ。心して聞け。」

そして、レックウザの話を聞いて、デオキシスはその言葉を疑った。
・
・

床に倒れる研究員。

ロンド博士もまた、同じように床に倒れていた。いや、彼の場合『
押しつけられている』といった方が正しい。それも、米噛みに拳銃
を突きつけられて。

そして、主犯格の少女は博士の椅子に座り、自身の髪で暇を持て余
していた。

「何が目的何だ君たちは……」

漏れるような声で少女・色欲チャームに問う Rond 博士。
椅子を反転させ、床に伏せる Rond 博士の方を向く。

「いろいろありますけど、第一目的は、人工衛星の無力化ですね。
もう一つは……。お子さんをお借りしますけど良いですよ？ 大丈夫ですよ。万事うまく行けば、お子さんは無傷でお返ししますから。」

一片の曇りもない笑顔で話す、色欲チャーム。しかし、その笑顔の奥の、闇に Rond 博士は畏怖していた。緊張で出てくる汗ではなく、畏怖の念で出てくる汗が……

椅子を本来の方向へ戻し、コンソールを操作する部下に問う。

「で、後どれくらいで無力化出来そうですか？」

「第一の監視衛星は、もう間もなくです。ですが、それらを補うサブ衛星も含めるともうしばらくお時間がかかります。」

「具体的には？」

「三時間ほど。」

髪を弄るのを止め、悩み始める。

時間がかかりすぎる。最悪、クロノの息子たちとはち合わせる羽目になりかねない。

はち合わせれば、確実に戦闘になる。そうなれば、不安定要素の『異世界の存在』が厄介である。

「……本部へ連絡を。内容は、『一部、プランBへ移行された』で。それと、隠ぺい工作は念入りに……。暴食イートに食べられたくなかったね。この前もミスして、一人食べちゃったしね。」

色欲チャームのこの言葉で、他の団員達の背筋に緊張が走った。

ロンド博士を抑える男ですら、冷や汗をかいていた。

『食べられなくなかったね』

この言葉は、まさに『物理的』な意味での『食べる』だった……

P i P i P i P i ……

研究室に響く、携帯の着信音。

音の発信源は、ロンド博士の内ポケットからだった。

博士を押さえていた男がそれを取り、着信は相手を見る。

「受付からです。」

それを色欲チャームに報告し、指示を仰ぐ。

「……出てもらって構いません。ですが、博士。下手な事したら、息子さんが怪我しちゃいますよ？分かってますよね？」

そう言い、男は着信ボタンを押し、博士の耳に当てる。

『博士、お忙しい所すみません。よろしいですか？』

「か、構わんよ。どうした？」

『お客様がお見えになってます。クロノ様の息子様と御つきの方々が面会を、との事ですが。』

受付の話聞き、色欲チャームは面会を許可した。

忙しい身の Rond 博士と云えど、クロノとは面識が有り、その息子と会わないというのは、不自然と判断したためである。

魅了チャームの合図を受け、Rond 博士は面会を承諾し、電話を切った。

「では博士。聡明な貴方の事ですから、お分かりだと思えますし、何度も言わなくても分かっていると思いますが。最後に。・・・下手な事したら、息子さんの一生が、ね？」

指を鳴らし、正面も画面の一部が別の風景を映し出す。

そこは、どこかの倉庫らしい場所で、そこには色欲チャームの部下達と一緒に居る息子のトオイの姿が。

「分かった・・・。言うとおりにする。だからトオイには・・・」

「まあ！流石博士です。御聡明な頭腦の持ち主で助かります。ですが、万が一と言う事も有りますし、マイクだけつけさせて頂きますね。」

そう言い、博士の服に小型の盗聴用の小型マイクを仕掛け、面会に行かせる。

第二十五話 「Incarnation of rage」

大きな来賓室には上質なソファールとおしゃれなガラス製のテーブルに部屋を彩る色とりどりの花。

ソファールに座る、星とハクリ、ソウマ。

シャインとルカリオはソファールの後ろで立っている。

ロンド博士とクロノが知り合ったのは、数年前のテロ事件の時だった。

このタワーをテロリストが占拠し、身代金を要求したこの事件を終わらせたのは、他ならないクロノだった。
それからの付き合いであった。

「でも、広いね。この部屋。」

ソファールに座り、部屋を見渡すハクリ。

しかし、物が無いだけで、実質この部屋はハクリ達の部屋程の大きさもなかった。

そんなハクリの言葉を聞き、『お前の部屋の方が十分広いって』と言う顔をする星。

そんな時だった。

この来賓室に、ロンド博士が来た。

「やあ、みなさん。遠いところから。」

いつもと変わらないロンド博士。しかし、ハクリとソウマを見て少

し顔色が変わる。

クロノが死去した事は無論知ってたからだろう。

「……お父さんの事は、辛い事だったね。」

ソウマの前に屈み、その手をとる。

「いえ。泣いている時でもないですから。」

揺るぎない自分の信念を言葉にし、ロンドに返す。

その姿を見て、頷くロンド。

そして、立ち上がり星と向き合う。

「よ！ロンド博士、久しぶりだね。何時ぶりだろうね？」

いつもと変わらない星の態度で、この場の雰囲気は大分明るくなった。

こう言った事が出来るのが星の長所でもあった。

「やあ、星さん。本当に何時ぶりだろうか？……と、世間話をするためにクロノ君の御子息を連れてきた訳ではないだろ？本題はなんだい？君がわざわざ足を運んだんだ、よほど重要な事なんだろう？」

的を射た事を聞くロンド博士。

「おっ！流石は博士。……んじゃ本題な。ここ数日、いや数カ月
の衛星から見た画像と飛行した物体のデータを見せて欲しいのよ。
理由は……言っと博士が危ないから伏せさせてよ。」

ゴメン！と手を合わせながら、話す星。

「っと。そんなに早く言われると忘れてしまうよ。少し待ってくれ、今紙にメモをとるよ。」

そう言い、老眼鏡をかけ、テーブルの上に有ったメモ用紙とペンで何かを書き始めた。

そんな光景を監視カメラで覗く色欲^{チャーム}。

音声も聞こえるため、星達に助けを求めれば直ぐに聞こえる。しかし、そんなそぶりは無かった。

「……………」

爪を噛みながら、注意深く見る色欲^{チャーム}。

「……で、他に何か欲しい物は有るかい？」

ペンを止め、星に聞くロンド博士。

「いや？得には……。つと。いやいや。まだ、有ったわ。氣象観測のデータも欲しいな。あとは……。ええ〜つと」

天井を見上げ、考え始める星。

そんな星を不審に思うハクリとソウマ。

しかし、後ろのシャインは何も言わずにロンドの紙を見ていた。

ソウマは視線だけ、そのメモ書きに向けた。

『息子が人質に取られている。手を貸してほしい。』

『おそらく君たちが捜していると思われる、敵はここに居る。』

『息子は、ここの地下倉庫に捕らえられてるハズだ』

メモ書きは全くの嘘だった。

ロンド博士は監視されている中、いかに星に助けを求めるかを考え、その結果がこの策だった。

「後は……。無いか？どうよ？何とかかなりそうかい？」

星の質問を機聞き博士は、老眼鏡を外しながら、答えた

「君の頼みだ。なんとかしよう。……しかし、少しばかり時間がかかるかもしれない。待ってもらうかも知れないが、構わないかい？」

申し訳なさそうな声色で話すロンド博士。
しかし、星はそれを簡単に了承した。

「んじゃ、おいつちゃん少し用事あるから、少し席外すわ。なあゝに、物の五分もかからないからさ。博士も、おいつちゃんが居ない間に、データが集められたら、少年達に預けてよ。」

「解った。君たちはもう少し待っていて欲しい。時間がかかるようなら、追って連絡する。」

そう言い、星とロンド博士は部屋を後にした。

来客室を後にした星は、ポケギアを取り出し、誰かに連絡を取り始めた。

「よ。今、ラルースに居るよな？ちよと仕事頼めるかい？」

『大凡の予想は出来てるさ。タワーの地図を送ってくれ。おっさんもしくじるなよ？』

「喧しいわ。んじゃ頼んだわ。」

電話を切り、代わりに一つのモンスターボールを取り出す星。

「お前さんも頼むぜ？……さて、逃がさねえぞ。」

その言葉を発した瞬間、星の顔つきが別人のように変わった。

星達と別れたロンド博士。

先ほど書いたメモをポケットにしまい込んで、研究室に戻った。

「お帰りなさい博士。……バレないで助けを呼べると思いましたか？」

入った途端に色欲チャームからの質問に冷静に対応する。

「何を根拠に。まさか紙に書いて助けを呼んだとでも？なら、勘違いだ。これがさつき書いたメモ書きだ。見て見るんだな。」

そう言い、メモ書きを渡すロンド博士。

魅了チャームもそれを受け取り、中身を見るが、確かに星が言っていた事だけだっけを書いていた。

そして、画面越しの来客室には星が戻って来た。

「仮に私が助けを呼んだとしたら、星さんがこんなに早く戻ってくるはずも無いだろう。君は勘ぐりすぎだ。」

星が部屋を出ていたのはものの数分。五分にも満たなかった。たしかに、人質を救助するには時間的に無理な話であり、なにより、倉庫を襲撃したのなら団員から連絡が入るが、それも無い。勘ぐりすぎ？そう思った矢先だった。

色欲チャームの襟首のマイクに連絡が入った。

「どうしたの？」

『襲撃です！敵は一名！で、ですが！』

「落ち着きなさい！」

慌てる団員を一括する色欲チャーム。

そして、再び団員が何かを言おうとした瞬間に、部屋が非常灯に切り替わった。

無論、全ての画面も非常灯に変わった瞬間に暗転した。

「停電！？いえ、これは！」

色欲チャームが現状を把握する前にロンド博士と研究員は研究室から逃げ出した。それを追う数名の団員チャームと魅了チャーム。

混乱に乗じて逃げる。魅了チャームもこれは納得出来た。しかし、何かおかしかった。自動ドアはロンド博士達を通る時は、その役目を果たすが、魅了チャーム達を通る時は、手動でなくては開かない。

そのため、ロンド博士達との差は、どんどん伸びて行く。拳句、非常用の防壁まで下りてくる始末。

星が数分席を外した時に何かをしたのは明確だった。また、ロンド博士達の逃げ方にも少し疑問が有った。室内の構造が

分かっているとはいえ、何かに指示されているように逃げている。

「……なるほど。流石は星トリックスターと言ったところかしら。となると……」

何かを確信した色欲チャーム。

そして、直線に長い廊下に差し掛かった時、

「ここね！行きなさい『レパルダス』！『ねこだまし』！」

逃げる Rond 博士達を追い越し、何も無いところに『ねこだまし』を繰り出す色欲チャームのレパルダス。

一見無意味な事をしていると思われるが、違った。

ねこだましの後に、その姿を現したのは、ムウマーヅだった。ゴーストタイプゆえに、姿を消す事は得意なため、こう言った状況なら適切な役目と言える。

しかし、問題は誰のポケモンか・と言う事である。

「……流石は、星さんと Rond 博士ですね。こちらに悟られないように、脱出の計画をたて、今手元にあるポケモンで最も適したポケモンを使うなんて。差し詰めそのムウマーヅも星さんの子ですか？」

後方を色欲チャーム達が。後方を彼女のレパルダスが塞ぐ。

逃げ道が無いこの状況。

「……君たちは、このタワーの構造に詳しいかい？」

こんな状況で Rond 博士が色欲チャームに聞く。そしてさらに続ける

「外に面した廊下ならば、ガラスを割って助けも呼べるが、ここはタワー内部で内部を見る事が出来ない。」

「ええ。とても残念ですね。助けが来なくて。」

「しかし、このタワーは中心に巨大なパイプを立てた後に外壁を立ててる特殊な構造でね。中心のパイプには配線や電圧ケーブルなどが走っているが、『中型のポケモン程度』なら通れるぐらいの隙間は有る。工事もしやすくするための配慮でもある。」

「!!!」

ロンドの言葉を聞き、団員達に指示を出す前に魅了チャームは後方に回避した。

その行為が少し遅かったら、彼女は奇襲をもろに受けていただろう。彼女のいた場所の壁が爆発を受けたように砕ける。

「よお。お譲ちゃん探したぜ?」

煙の中から出てきたのは、星とボーマンダだった。

「流星は、星トリックスターですね……。それに、ボーマンダにムウマージ。その子たちは……。」

「ご明察の通りだぜ。……クロノが使っていたポケモン達だ。」

旗色が悪くなってきた色欲チャーム。
しかし、勝てない相手ではないにしろ、今の任務は星を倒す事ではない。

『色欲様。作業完了しました。』

イヤホン越しに聞こえる部下の声。これで、ここでの任務は終わった後は逃げるだけであるが……
一步後ろに下がる色欲。

「おいおい。おっちゃんちょっと小粋なトークしようよ。」

セリフはいつもの星だが、声の奥にある思いは全く別の物だった。

「女の子は多忙なのよ、おじさん。」

そして、自分の足元に煙幕を投げる色欲。
むせ込む星達。

「っち！逃がすかよ！……博士達はひとまずタワーから離れる。それと、子供はポケモンセンターに避難してる。会いたきゃそこに行ってくれ！」

一方的に星が指示を出し、色欲を追う。

立場が逆転した色欲

逃げながら全ての部下達に撤退の指示を出し、自分も撤退の方法を考えていた。

今の自分の手持ちのポケモンで、クロノが扱っていたポケモンを相手にするのはきついものが有った。

ポケモンの実力で考えれば、かなりの差が有った。色欲はそれを瞬

時に見極め、最良の選択である『撤退』を選んだのであった。

屋上に有る大展望台。一応の手はずでは、そこから逃げるはずだったが、その一つ下の階にある室内展望室には団員以外の先客が来ており、団員達は全員床に伏せていた。

「…………あら。ここは貸し切りかしら？」

倒れる団員達とそのポケモン達の中に立つハクリ、ソウマ。そして星。さらに、もっとも危険と思われる異世界の者に聞く。

「探しましたよ。お父さんの敵…………！」

「絶対に許さないからね！」

ソウマの静かな怒りにハクリの棘が刺さるような怒りの感情。

「…………そちらの星さんは、『ゾロアーク』ですか。なるほど。」

色欲チャームの言葉で、姿を化かす必要性を無くした『星』は宙帰りをし、本来の姿に戻った。

黒い体に、キツネを立たせたような姿のポケモン。それがゾロアークである。

生き物に化ける事を得意とするゾロアークにとって、人に化ける事は簡単な事だった。

星との距離はまだある。覚悟を決め、レパルダスを出し戦う姿勢を

とるが……

「……………私の変わりは……………いるか……………」

小さく自分に言い聞かせるように言葉を漏らす魅了。チャーム

「ソウマ、行けるな？」

シャインに促され、頷くソウマ。

ここに居る団員達を倒したエアームドは疲労しているため、リザードンに変える。

そして、これがリザードンの初めての対戦でもあった。

「行くよ、リザードン！！」

ソウマの指示で低空飛行で距離を詰めるリザードン。

迎え撃つレパルダス。

この時、全員が何が起きたか理解できなかつた。

一瞬がスローで見えた。窓ガラスが割れ音が、リザードンが横に蹴り飛ばされるこの一瞬が。

何が起こったかを理解するのに、しばらく時間がかかった。

リザードンが居た場所には、彼らが最も見慣れた、そして彼らの憧れのトレーナーが最も敬愛していたポケモンが居た。

「バ・・・シャーモ・・・」

ゆっくり立ちあがるバシャーモ。

明らかに何かおかしかった。しかし、今の彼らのそれを理解する余裕は無かった。

壁に蹴り飛ばされたリザードンも起き上がり、目の前に立つ新たな強敵に対象を変え、『火炎放射』で牽制をかけるが、逆に、そのバシャーモに距離を詰められ、カウンターの一撃を受ける。

今度は反対側の壁に蹴り飛ばされるリザードン。

「リザードン!!」

吹き飛ばされたりザードンに駆け寄るソウマ。

「なに、このバシャーモ!でたらめなほど強いじゃん!?!お父さんのバシャーモと同じ?もしかしたらそれ以上!?!」

「このバシャーモ・・・まさか・・・」

違和感を覚えるシャイン。いや、見覚えが有ったというべきなのかもしれない。

「中々威勢が良いリザードンだな。しかし、まだ未熟だな。」

屋上展望台へ続く階段を下りてくる一人の男。

袴を思わせる衣服に、腰に下げた日本刀。そして、目元を覆うような仮面を着けた男。

「憤怒……」

色欲チャームの言葉を聞き、ソウマとハクリが復唱するかのよつに彼の名を呼ぶ。

「……どついでのことだ……」

シャインもその男を目の前にして、驚きを口にしてしまった……

第二十六話 「英雄狂乱」

畏怖

恐怖

これほど、この言葉が会おう人物は居ない。
ハクリとソウマは思った。

「憤怒^{レイジ}……」

ハクリが男の名を口にしているが、刹那に体に走る恐怖。それに呼応するかのように、足が震えだし、呼吸が乱れる。息ができなくなりそうな感覚。

「ほお……。この殺気で倒れないか。しかし、それだけだ。俺と戦う資格はまだ無いようだな。」

腕を組み、ハクリを見る憤怒^{レイジ}。
次にソウマを見る。

しかし、ソウマは後ずさりこそするが、自分を保っていた。

「ひ、退けないんだ……。お父さんの敵をようやく前に出来たんだ……!!」

自分を奮い立たせ、一歩前に入るソウマ。

「……良い気迫だ。その年でこれほどは……。」「

腕を解し、バシャーモを自分のもとに呼び戻し、構える。

「少年、恨むなら、己の非力さを恨め。……………大きな障害になる前に潰す！！！」

憤怒の叫びと共に床を蹴り、バシャーモがソウマとの距離を瞬時に詰める……………が。

バシャーモの蹴りを受けたのは、シャインとルカリオだった。

『貴様に聞く！お前は誰だ！？』

『……………シラナイ』

『何？』

『……………オレハジブンノカコヲシラナイ。オマエハシツテイルノカ？』

『やはり……………！』

「バシャーモ！！何を話している！！！」

『……………カコナドイラナイ。アノ『人』ノタメニタタカエルダケデ！！オレハ！！！！！！』

憤怒^{レイジ}の声を聞き、バシャーモの足にさらなる力が加わり、シャインとルカリオを蹴り飛ばす。

そして、再びソウマへの道が開けた。その道をバシャーモは駆ける。

ソウマのリザードンは戦闘不能な状態。仮に戦えたとしても、あのバシャーモには勝てない。

手持ちで一番強力なポケモンが不意打ちとは言え、瞬間でやられた。今のソウマには、あのバシャーモを止めれる戦力は無い……。直ぐにソウマはこの結論のたどり着いた。

そして今、憤怒^{レイジ}対して、強気な言葉を発したが……………。

無理だった……………。ごめん父さん……………。

そんな言葉が、ソウマの頭の中を廻っていた……………。

ソウマを自分の間合いに入れたバシャーモが、その足を振り上げた。

しかし、その足はソウマを蹴るのではなく回避の為に使われた。

ソウマとバシャーモの間に走る『水鉄砲』と『ラスターカノン』

技を出したのは、ハクリのワニノコとコドラである。

足を震わせながら、必死に立つハクリ。

背一杯の笑顔をソウマに向け

「へへへ……。ようやく出来た、『ラスターカノン』。わ、私今
主人公みたいじゃん……。」

笑顔こそ見せているが、未だ恐怖を拭えていない。

しかし、ワニノコは戦う気だった。

実戦経験が少ないワニノコ。圧倒的な敗北を知らないがゆえに、強
敵へ挑む恐れを知らない。だからこそワニノコは戦う姿勢を見せた。

しかし、コドラは違った。目の前にバシャーモに対して、挑む事の
愚かさを本能で察していた。

それを教えたのは、他でもない彼らの父親だった。

「ソウマ、ハクリ！！お前らじゃ無理だ！俺が行く！！」

ソウマの前に割って入る星。そして、取り出したモンスターボール
からは、クロノから借りた、彼のバシャーモが出る。

そんな光景を前に憤怒^{レイジ}は笑いだす。

「くくくく………。英雄が新たに握った刀か。」

「……何かおかしい？」

「良いだろう。最後に見せてやる。……これが本当の英雄の刀だ！」

憤怒^{レイジン}が腰より取り出し、無数のモンスターボールを宙へ投げる。ボールの中から出てきたのは、

ガブリアス

ムクホーク

ウィンディ

ボーマンダ

ガラガラ

ルカリオ

ムウマージ

ニドキング

マニニューラ

そして、バシャーモ。

ハクリとソウマは驚くしかなかった。

目の前にいるポケモン達は、全てクロノが使っていたポケモンと同じだからだ。

世界は広い。ゆえに同じポケモンを使う事は珍しい事ではない。しかし、このポケモン達は何か違う。

懐かしい感じが有った。

「貴様ら！！そこまでするか！！」

星が怒りをあらわにして色摩チャームに対して怒鳴る。

初めてだった。星が、本気で怒る姿を見るのはハクリ達は初めて見た。

「そうだ。こいつらは、貴様らが父・クロノが全盛期に使っていたポケモン達だ。どうだ？我らの技術が有れば、死んだ者をこうして生き返らせ、再び戦地に立たせる事も出来る。」

「黙れ！お前に聞いてねえ！！俺の前でお前がそんな言葉を吐くな！！！」

明らかに冷静さを失っている星。それも憤怒レイジを見てからである。

それをあざ笑うかのように憤怒レイジは笑っている。

「…………お父さんの…………ガレス達を………………
…………道具みたいに言うな!!!!!!!!!!」

涙を流しながら、ハクリが叫ぶ。

クロノがどんな思いで、ガレス達と別れたか近くで見ているから、許せなかった。

ポケモンセンターの一室。
点滴が繋がれたガレスが横になっている。

老衰

生物として、これは避けられない。
必ず訪れる出会いと別れ。

「……クロノさん。もう、これ以上は……」

「そうですね……。」

それだけ言い、クロノはガレスに近づき、そつと手をガレスに伸ばす。

その手の感触を感じ、ガレスはその目を開ける。

「……今まで……ありがとう……。もう、休んでいい……から……。」

まるで、子供のように涙を流すクロノ。しかし、必死に笑顔を作る。そんなクロノを見てガレスも涙を流しつつ、笑顔を作り、手を伸ばすが……。

その手がクロノに届く事は無かった……。

床に膝をつき、声をあげて泣きだす。

そんなクロノの後ろ姿を見ていたのが、幼いハクリだった……
そんな過去を知っているからこそ許せなかった……許したくなかった……許せるはずが無かった……。

「ワニノコ!!!」

ハクリの指示で勝てない相手に向かうワニノコ。

「未熟!!!」

無謀なワニノコの相手は、バシャーモ

よもやこれは『ポケモンバトル』と呼べるものでは無かった……
ポケモンの体格さもそうだが、経験、戦い方、技の選択、そして、
冷静さを欠いたハクリの指示。

圧倒的な力の蹴りをもろに受け、壁に叩きつけられるワニノコ。

「ワニノコ!立って!!!」

よもや全てが見えていなかった。

それを見た星。

「……ハクリ、ソウマここは退くぞ!!」

ハクリからボールを取り、ワニノコを戻し、ハクリを抱え、窓に向かって走る。

「星さん!! 放して!! お父さんのガレスが!! みんなが!!!!」

「黙れ!!」

そして、窓を突き破り、

「その、マスク! いつか剥ぎ取るからな!! 待ってる!!」

それだけを言い残し、シャインもルカリオとソウマを連れて、星の後に続く。

憤怒レイジはそんな星達をただ見ていた。

それから、彼らがラルースから逃げるのは、入る時より造作もなかった。

長い廊下を、歩く憤怒と色摩^{チャーム}。
突然、色摩^{チャーム}が憤怒^{レイジ}に聞いた。

「……………何で助けに来たの。この組織は総帥以外は皆替えが効くのに……………」

歩みを止め、色摩^{チャーム}と向き合う憤怒^{レイジ}

「志が同じ同士を、簡単には見捨てられないな、俺は。それに、今

こうして話している色摩チャームはお前一人だ。変えは効かん。」

それだけを言い、憤怒レイジは再び歩き出した。

「……………こんな私を必要としてくれる人が居る……………?」

色摩チャームが漏らしたこの言葉は、誰にも聞こえなかった。

廊下の先の部屋。

そこからは、この地方の広大な景色が見渡せるバルコニーになっていた。それもかなり広い。ダンスパーティーが開ける程の。

そんなバルコニーには、憤怒レイジと同じ七つの罪を背負った者と総帥と呼ばれる者だけがいた。

総帥はそんな彼らを背に、詩を読んでいた……………。

その詩は、とても美しく、履がなく、悲しく、醜い、詩だった……………

詩を読み終え、椅子から立ち上がり、七人を正面に捉える。

「ようやく、七人全て揃ったのだね。……長かったよ。では、
諸君。行こうではないか。『アルセウス神の玉座』のその奥へ……。」

『全ては、彼らの解放のため』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0445j/>

ポケットモンスター～虹に憧れる者達～

2011年11月16日10時25分発行